

北海道博物館における言語展示への試み（報告）

—総合展示第2テーマに設置した「アイヌ語ブロック」を中心に—

田村雅史・出利葉浩司

Key Words

博物館展示 (Museum exhibition)、言語展示 (Linguistic exhibition)、アイヌ語展示 (Ainu language exhibition)、アイヌ語 (Ainu Language)、北海道博物館 (Hokkaido Museum)

第1章 はじめに

この報告は、2015年4月18日にオープンした北海道博物館の総合展示第2テーマ『アイヌ文化の世界』に設置しているアイヌ語に関する展示物「アイヌ語ブロック」についての、展示の自己評価を含めた事業報告である。

この報告では、「アイヌ語ブロック」という展示物を、展示製作者の立場から検討し、評価する。そうすることで、ひろく博物館における言語展示の可能性や問題点を議論する素材を提供することが目的である。その目的のなかには、身近な「ことば」を展示物の名称や解説を伝える単なるツールとしてではなく、記録し、次の世代に伝えるという観点でみた場合、博物館はどのような貢献ができるか、逆に博物館に求められていることは何かを考えるきっかけを提供することも含まれている。

北海道博物館は、建築物自体および博物館としての一部の機能は、旧北海道開拓記念館（1972～2015；以後、旧記念館と略す）を受け継ぎながらも、旧北海道立アイヌ民族文化研究センター⁽¹⁾（1994～2015；以後、旧道立センターと略す）との統合の結果、まったくあたらしい博物館組織・機能そして展示をもった総合博物館として2015年4月に開館した北海道立の施設である。アイヌ民族の歴史や文化の調査研究および展示という機能面からみれば、旧記念館がおもに実施してきた有形のアイヌ文化に関する調査研究機能と、旧道立センターが実施してきた言語や芸能といった無形のアイヌ文化やアイヌ史に関する調査研究機能が一つとなり、北海道博物館の内部組織としてアイヌ民族文化研究センターという新たな総合研究機関が誕生したことになる。

北海道博物館では、アイヌ民族の歴史や文化にかかわる展示物は、いくつかの部分に見られるが、それをテーマとして中心に据えて展示を構成した部分として第2テーマ『アイヌ文化の世界』がある。この展示は、その企画から展示内容、展示物の選定に至るまで、ほとんど

すべて旧道立センターで行ったものである。この『アイヌ文化の世界』展示は、言語や物語、そして歌や芸能といった無形文化に重点を置いたり、アイヌ民族の近現代史や現代の多様性など、これまでのアイヌ文化展示で取り上げられることがなかった点を紹介するという発想でつくられている。このことは、旧記念館におけるアイヌ史や文化についての展示のコンセプトや内容を受け継いだものではないことも意味している。

本報告では、旧道立センターにおいて、この報告でとりあげる「アイヌ語ブロック」を企画し、展示するにいたった経緯を、第2章でその背景となった社会的な情勢や北海道博物館の基本的な構想を簡単に紹介した上で、アイヌ語ブロックのアイデアについての経緯と目的を報告する。第3章と第4章では、第2テーマ『アイヌ文化の世界』のなかのアイヌ語展示はどのような構成になっているのか、さらに「アイヌ語ブロック」の学術的な根拠を提示しながら制作過程の課題に対する対応等について報告を行う。そうした報告に加えて、第5章では筆者らの見聞の範囲で博物館や美術館等の施設（以後、博物館で統一する）における言語展示の事例を紹介しながら将来的な課題を含めて整理する。そこではとくに「少数民族の言語」⁽²⁾に関する展示がどのように行われてきたのかということに注目する。最後に、報告のまとめとして、博物館における言語展示としての「アイヌ語ブロック」展示の自己評価と位置づけをおこなう。

ただし、本報告にあたって、他館の事例については筆者らが検討に耐えうるような実地調査を重ねていないこと、また本報告の動機が調査に基づいた学術論文を執筆することではないことなどの理由により、本稿には調査不備や分析の荒さなどの課題が多々あることは、ここで断っておきたい。

ここで、われわれ執筆者について、本報告での役割、北海道博物館におけるアイヌ文化展示『アイヌ文化の世界』における担当部分、および専門分野について紹介し

ておくことは、本報告の理解に有益であるとおもうので、簡単に記しておきたい。

田村は、旧北海道立アイヌ民族文化研究センター（現、北海道博物館アイヌ民族文化研究センター）の研究職員であり、専門は言語学（アイヌ語）である。また、北海道博物館のあたらしいアイヌ文化の展示『アイヌ文化の世界』では、旧道立センターの研究職員としてアイヌ語にかんする部分を中心に担当している。出利葉は、旧記念館時代からの学芸員であり専門は文化人類学とくにアイヌ民族誌と博物館民族学、および博物館学である。あたらしい『アイヌ文化の世界』展示の企画、立案および制作にはまったく参画していない。本報告では、専門としてきた博物館民族学および博物館学の立場から、旧記念館を含めた言語展示を概観し、また本報告作成における田村との議論に参加している。本報告の執筆は、田村（主に第2章から第4章を担当）と出利葉（主に第5章を担当）とが、協議しながら、各節で分担しておこなっている。これは上述したように、専門性と役割を考慮してのことである。執筆責任者は各節の最後にカッコを付けて明記した。また注においても必要がある場合には執筆者名を明記した。（出利葉・田村）

第2章 北海道博物館の試み

—なぜ、アイヌ語ブロックなのか—

冒頭でも紹介したように、2015（H27）年に北海道博物館は、旧北海道開拓記念館と旧北海道立アイヌ民族文化研究センターが組織統合し、名称を「北海道立総合博物館」として改め、リニューアルオープンした。北海道博物館の「アイヌ語展示」の試みを報告する上で、北海道博物館のアイヌ文化の展示の背景や考え方を紹介しておく必要があるため、関係する部分を紹介する。その後、アイヌ語ブロックのコンセプトをどのように設定したかについて報告する。（本章はすべて田村が担当した）

第2章 第1節 北海道博物館のアイヌ文化展示の背景や考え方

ここでは、2010（平成22）年に北海道が策定した「北海道博物館基本計画」、2013（平成25）年に北海道環境生活部が策定した「北海道博物館実施計画」の関係部分を紹介する。「北海道博物館実施計画」は、2010～2012（平成22～平成23）年度に道の特定重点事業として旧記念館で実施した諸事業を踏まえて策定されているため、重複を避けるため旧記念館で実施した諸事業の紹介は割愛する。

①「北海道博物館基本計画 ～開拓記念館のリニューアルから北海道ミュージアムへ」（北海道、H22.9）⁽³⁾

2008（H20）年6月に国会で「アイヌ民族を先住民とすることを求める決議」が採択され、その後の「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」の報告書において、アイヌ文化に係る提言がなされた。それに伴い、その提言にはアイヌ民族とその文化に関するさらなる研究の推進や最新の研究成果に基づく展示や学習の機会、情報発信の充実が盛り込まれた。道は、そうしたアイヌ文化に関する社会的な要請を含む、さまざまな旧記念館をめぐる情勢の変化を受け、「北海道博物館基本計画」（以下「基本計画」）を策定するにあたり、2008（H20）年6月に北海道文化審議会に対し、「北海道における博物館のあり方と開拓記念館の役割」について諮問した。審議会は、博物館関係者のほかにアイヌ民族の関係者や研究者の意見を聴き、幅広い観点から検討を進める必要があるという判断から、道内外の有識者からなる特別委員会を設置して検討を進め、2009（H21）年8月に知事に対し「開拓記念館の今後のあり方」として、以下のとおり答申した。

<求められる役割>

- ① わかりやすく、おもしろく、ためになる博物館づくりなど、博物館としての基本的役割
- ② 自然、環境を含む未来に向けた人間史の博物館、アイヌ文化を保存・伝承し未来に活かす博物館など、北海道における総合的な博物館としての役割
- ③ 人・モノ・情報といった分野におけるネットワークの充実強化など、道内の博物館の中核施設としての役割

これらの役割を果たしていくため、資料の収集・保存、展示、教育普及、研究調査などの観点から、博物館として発揮すべき機能を充実していく必要がある。

これを受けて策定された「基本計画」の中には、多様なレファレンスのニーズに応えると共に、より総合的な管理、相互理解を可能にし、道内外の研究機関や博物館の連携を強化し、アイヌ文化のさらなる調査研究の充実を図るために、開拓記念館と道立アイヌ民族文化研究センターとの統合を検討することが盛り込まれた。

また展示については、展示の基本姿勢として、「わかりやすく、おもしろく、ためになる」を意識していくことが明示され、総合展示においては、最新の研究成果に基づいた展示であること、更新しやすい展示構成であること、見学動線は来館者の興味に応じた選択が可能なように配慮することとされた。

②「北海道博物館実施計画」（環境生活部、H25.3）

旧開拓記念館館を所管する環境生活部は、「基本計画」

の実現に向けて必要となる取り組みをまとめた「北海道博物館実施計画」（環境生活部、H25.3）を策定した。そのなかではより実践的な内容が記され、展示構成も「実施計画」に沿って考えていくことになった。特に「実施計画」のなかで展示の手法については、次のようなことが明記された。

常設展示の改訂

（1）展示改訂の基本的な考え方

- ① 「歴史」や「文化」といった概念にとどまらず、利用者の多角的な関心（テーマ）を動機付けとして、北海道の遺産（資料）に接して思索を巡らせることが可能な展示とするため、年代毎に異なるテーマを設け、歴史の流れを理解することに加えて、次のコンセプトをもとに、観覧者の多様な関心をさらに広げ、深める展示に取り組む。

メインコンセプト ～ 北東アジアの中の北海道
サブコンセプト ～ 自然と人間との関わり

- ② 「アイヌ文化」「北海道の自然や環境」をテーマとしたコーナーを設ける。

（2）展示手法の変更

- ① 「来るたびに違う」展示
 - ・展示内容の変更や資料の入替を定期的に行う。更新が容易な展示構成、汎用性が高い展示什器を導入する。
- ② 「飽きない」展示
 - ・五感を刺激する体験的な展示手法の採用やジオラマ、ICT機器の効果的活用により展示表現にアクセントを付ける。
- ③ 「ユニバーサル」な展示
 - ・年齢層や興味レベル、母語、障がいの有無などを問わず、すべての来館者にわかりやすく、楽しめる展示とする。
- ④ 「疲れない」展示
 - ・観覧者が自由に選べる動線を配置し、通路幅や休憩用スペースを確保する。
- ⑤ 「新しい」展示
 - ・学問の進展や研究成果を反映させ、観覧者が最新の情報を得ることができる展示とする。

以上のようなアイヌ文化の展示の背景や考え方から、アイヌ文化展示の使命とも言えることを簡単にまとめると、次のようになる。

- I. アイヌ文化を保存・伝承し未来に活かす
- II. 最新の研究成果に基づいた展示⁽⁴⁾
- III. 「わかりやすく、おもしろく、ためになる」展示⁽⁵⁾
 1. 「来るたびに違う」展示

2. 「飽きない」展示（五感を刺激する展示）
3. 「ユニバーサル」な展示

「実施計画」を策定した翌年には、具体的な空間デザインや展示構成から什器に至るまで、具体的な展示に関する事柄をまとめた「実施設計」が決定した。実施設計を議論していくなかで第2テーマ「アイヌ文化の世界」におけるアイヌ文化展示のポイントは次のように整理された。

- ① これまでアイヌ文化展示があまり取り上げてこなかった、アイヌ語や口承文芸、音楽などの無形の伝承文化の紹介に重点を置くとともに、近現代そして現在（いま）を生きるアイヌの多様な暮らしと意識を紹介する。
- ② アイヌ語や口承文芸、音楽などの映像を、わかりやすい解説とともに聞いて・見て・楽しむことができる「アイヌ文化シアター（仮称）」を設けるほか、「楽器にふれる」「衣服の布地を手にとってみる」など、体験・体感するメニューを増やす。

ここからわかるように、「実施設計」においては「アイヌ語」が大きなポイントの一つとなっている。実際にアイヌ語に係わる展示全体としてどのように対応したのかは第3章で述べることとし、次節では先にまとめた「使命」に沿いながら、本報告のテーマである「アイヌ語ブロック」のコンセプトの概要について報告する。

第2章 第2節 「形あるもの」としてのアイヌ語展示

「アイヌ語ブロック」のアイデアに至る前の段階での最大の問題は、「ことば」の展示資料として何を選択し、「ことば」を展示する手法はどのようなものがあり、先にまとめた「使命」Ⅰの「未来に活かす」、使命Ⅲ-2の「飽きない展示」をクリアする有意義な手法かどうかを検討することであった。第5章で筆者らの知見の範囲内で紹介する事例は、「ことば」を身近にある「ことば」そのものとして、つまり「音声」を展示していたり、展示物のラベル等で「ことば」を可視化した「文字で書かれたことば」を展示のなかに取り入れたものである。また、直接的に「音声」や「文字で書かれたことば」を展示に用いるのではなく、第5章で詳述するように国立民族学博物館の「ことばスタンプ」やボストンの子ども博物館などのように物質を介らせて「音声」や「文字で書かれたことば」を展示している場合もある。そうした点を概略的にまとめると、博物館に展示されているさまざまな展示資料が「形を持つもの」として存在するのに

対し、「ことば」は「形を持たないもの」として展示されがちではあるが、物質を介在させる試みもあるとまとめられる。また言語学の分野からみると、単語、語族関係等の言語史、社会言語学といった分野が多く、われわれが外国語を習うときに苦労しながら覚える音声、音韻、形態といったいわゆる文法は、あまり展示されていないと言えるだろう。

そのような「形をもたない物質」の展示を、先の「使命」に沿って少し詳しく分析してみたいと考えるが、その前にいくつか断っておきたい。まずアイヌ語ブロックは「実施設計」の最後の最後の段階（締め切りの約二ヶ月前）に「実施設計」に加わったこともあり、情報収集はホームページや個人的な情報交換の程度で行い、それ以外は筆者のこれまでの経験と知見の範囲で「ハンズオン展示」のアイデアを考えていた。それゆえ、「使命」に沿って分析するといっても、当時はここで展開するような整理はしてはいなかった。また冒頭でも述べたように、筆者らの報告意図や執筆に係る調査準備不足などがあることを改めて断っておきたい。⁽⁶⁾

まず使命の「Ⅰ. アイヌ文化を保存・伝承し未来に活かす」や「Ⅱ. 最新の研究成果に基づいた展示」は、「文字による概要説明」を工夫したり、単語の音声を流したりする（最新の調査結果）ことで、どうにかクリアできるだろう。だが、Ⅲをすべてクリアできるのだろうか。Ⅲ-1「来るたびに違う」展示については、音声機器を使用する場合は内容を頻繁に入れ替えたり、コンテンツ数を増やすことである程度対応できる。しかし、担当者や館資料の事情で容易に音声資料を用意できないこともあるだろうし、プログラムを作成する専門技術者が館側にいなければ、そのための費用を捻出する必要も出てくるだろう。また物語の音声を流す場合には、言語を観察してもらうための工夫を欠くと、来館者の主な関心は文字テロップ等の情報から物語の内容を理解することに傾き、「言語展示」そのものよりも、「物語展示」に傾斜してしまうこともあるだろう。そして常設展示されている「文字による概要説明」をⅢ-1「来るたびに違う」展示に資するために入れ替えることになった場合には、担当者が日常業務の中で入替のための準備作業を行い（写真の許諾、図の作製なども含む）、企業に発注してパネルの内容を詰めていきながら作成することになる。よって時間とコストが掛かり、入れ替えることは早々できないのが実情である。つまり、第5章で紹介する多くの事例は、使命Ⅲのところで行き詰ってしまうことになる。

では、国立民族学博物館の「ことばスタンプ」やボストンの子ども博物館のように物質を介在させる方法は使命Ⅲに対してどうであろうか。確かに、そうした展示はいくつかのバリエーションが考えられており、飽きな

い工夫がなされたうえに、言語に興味関心を寄せてもらう工夫もなされていると言える。しかしながら、「ことば」のどの側面を展示しているかを見た場合、音声や単語に主眼があり、言語の構造までは展示できていないといえる。つまり、来館者の年齢層や興味レベルで見た場合には単語だけでは飽きてしまったり、文の構造に関心を抱く来館者も想定できるため、必ずしも楽しめる展示（使命Ⅲ-3）とは言い難い側面もあるように思われる。これは単語のみの音声展示も同様のことがいえる。もちろんここで取り上げた2館の事例は、「形を持たない物質」として「ことば」を展示するのではなく、物質を介在させて、形を持つものとして「ことば」を展示している点は十分に評価してよいだろう。

以上のような事例の分析から使命のⅢについて十分に検討を行う必要があることがわかるだろう。アイヌ語ブロックを考えた際には、国立民族学博物館の「ことばスタンプ」やボストンの子ども博物館のように物質を介在させた展示事例を事前に調査していた訳ではないが、2館の取り組みのように「形を持たないもの」として「ことば」を展示するのではなく、アイヌ語展示のなかにも「形を持つもの」として「アイヌ語」を展示できないかを強く考えていた。もちろん、第4章で紹介するアイヌ語に係わる展示がアイヌ語ブロックのアイデアの前段階でほぼ決定していたため、そうした展示のアクセントとして「形を持つ」アイヌ語展示を考えていたことを言い添えておきたい。

実際にアイデアを考える際には、特にⅢのリクエストである、五感を刺激し、年齢層や興味レベルを問わず、来館者にとって楽しく、わかりやすく、ためになる、という点をすべて満足できるアイデアはないかを考え、まず最初にカルタやパズルのようなものを考えた。しかしいずれも「形を持つもの」ではあるが、Ⅲのリクエスト（特に年齢層や興味レベル）に応えるには十分ではなかったり、第4章でも触れるようにバリエーションを確保するための設計上の工夫、それに付随する予算とスペースの問題があったため、それらのアイデアは採用しなかった。そこで、飽きないで、わかりやすく、ためになる展示品として、カルタやパズルのように組み合わせる楽しみがある積み木を利用して、アイヌ語の文を作ることができるものを作成できないかと考えた。さらに特に子どもが手に取って、単語の意味が直感的にわかるようにイラストを入れることも考えた⁽⁷⁾。こうしたことから「アイヌ語ブロック」のコンセプトを次のように決めた。

『子どもたちが、楽しみながら感覚的にアイヌ語の語彙や文法に親しめる』

このコンセプトから想定した来館者の様子は、まず子供たちが、展示されているアイヌ語ブロックを見て興味

があるようならば触れる。そして楽しみながら単純に感覚的に並べ替えるなかで、語彙に注目したりすることで、自然とアイヌ語を発音したり、文法（日本語との語順の違い）を観察する姿であった（使命Ⅲ-2）。そしてもし子どもたちがわからなければ、同伴している大人が解説パネルを見て子どもに説明したり、実践してみせたりするような様子を想定した（使命Ⅲ-3）⁽⁸⁾。

以上をまとめると、アイヌ語ブロックは、道が策定した「基本計画」に則った展示物であり、なかでも「ハンズオン展示」を実現しようとした企画であるといえる。また展示論の観点から、アイヌ語ブロックは、これまでさまざまな博物館が行ってきた「言語展示」とは異なっていること、さらに物質を介在させた「言語展示」を単語や音声のレベルで行っている国立民族学博物館やボストンの子ども博物館とは異なり、形を持つ展示物を用いた「言語展示」を、文章のレベルで試みていると言って差し支えはないだろう。（田村）

第3章 北海道博物館第2テーマ『アイヌ文化の世界』におけるアイヌ語展示の位置

第2章で、北海道博物館の試みとして、展示改修の背景やその使命を紹介しながら、「アイヌ語ブロック」のコンセプトに至るまでの経緯を簡単に報告した。この章では言語学の視点でどのようにアイヌ語の展示を捉えて、実施したかについて報告する。まず3. 1節ではアイヌ語にかかわる各展示の概要や経緯を報告する。3. 2節では展示を作る際の前提として考えたことを報告する。そして、3. 3節では第2章で紹介したどの「使命」に資するものとして、各展示を構成したのかを自己点検的に報告し、この章の最後の3. 4節において「アイヌ語ブロック」について、より具体的な報告を行う。（本章はすべて田村が担当した）

第3章 第1節 アイヌ語にかかわる各展示の概要と経緯

「実施設計」時にはアイヌ語の展示を一つの独立したテーマとして立てていた。しかし第2テーマの展示作業を本格的に進めていく段階で、予算やスペースの問題から展示構成を再考する必要が出てきて、アイヌ語の展示を独立のテーマとして立てることを断念した。そのためアイヌ語にかかわる展示は以下に概観するように分散されたため、まとまりを持った「言語展示」としてのアピール度は決して高いとは言えなくなったが、3. 3節で見ると展示の「使命」を整理しながらそれぞれの展示内容を考えた。

ア) テーマサイン

北海道博物館の各展示テーマの入り口には、テーマ内容を象徴またはイメージさせる写真がテーマサインとして掲示されている。アイヌ語の主な展示があるのは、中テーマ「ことばを聴く」（大テーマ「アイヌ文化の世界」の中にある中テーマの一つ）で、アイヌ語のほかにアイヌの口承文芸、芸能といった無形文化全般を展示している。そのためテーマサインには、アイヌ民族の無形文化をイメージさせるものとして、アイヌ文化の伝承者である平取町の二谷国松氏（1888-1960）が、アイヌの英雄叙事詩をカタカナで書き残したノートを選び、その下に釧路鶴居村の八重九郎氏（1895-1978）が英雄叙事詩を語っている様子の写真を選んで掲示している。

イ) 中テーマ解説付

中テーマ「ことばを聴く」には2つの解説がある。1つは中テーマ全体を紹介する解説、もう一つは「実施設計」時に小テーマとして独立していたアイヌ語に関する解説である。後者は展示パネル上では中テーマ解説に添える形になっているが、文字数制限は他の小テーマと同じ250文字である。（本節では仮にこれを「中テーマ解説付」と呼ぶ）字数は多くはないが、中テーマ解説付ではアイヌ語の系統関係、近現代のアイヌ語の歴史、現在アイヌ語が直面している社会的な問題についての解説があり、その下に「主なアイヌ語諸方言の調査地」を図示して、アイヌ語の地図上の分布域を紹介している。

ウ) 詳細解説

詳細解説は、「実施設計」時には独立していた小テーマ解説の補足として計画していたものである。「アイヌ語」の小テーマがなくなった時点で、詳細解説の内容は「実施設計」時から「アイヌ語」の次にあった口承文芸の展示としても、展示資料を含めかかわりが深く、そのまま用いることでより効果的な展示になると判断し、中テーマ3の最初の小テーマ「いろいろな物語」のなかに取り込むこととなった。詳細解説は、研究史としてどのような人たちがアイヌ語を調査し、記録していったのかに絞り、近現代で多大な功績を遺した5人の人物を写真と共に紹介している。言語展示として用意していた資料は、金田一京助が1914年に北海道へ提出した報告書と知里真志保がサハリンで調査したときのフィールドノートで、それらは現在もそのまま展示している。

エ) トピック解説

「実施設計」では、アイヌ文化を北方諸民族の関わりで紹介すると共に、アイヌ文化内の多様性を紹介する計画であった。こちらは「アイヌ語」が独立のテーマとし

でなくなった事情とは異なり、什器設計の大きな変更により、2つに分けて紹介することになった。アイヌ語にかかわるのは後者のアイヌ文化の多様性のところである。そこでは、多様性に関する総体的な解説と共に、各地域の単語、口承文芸の一つのジャンル名、子守唄の呼び方、着物の種類を、地図上に落とす形で紹介している。言語の視点としてみれば、前の3つは図らずも単語の方言差を紹介する形になっている。

オ) アイヌ語ブロック本体 (写真1)

「実施設計」の最終段階（締め切りの約二ヶ月前）にこれまで計画していた展示に加えて、より展示を充実させるためのアイデアの募集があり、アイヌ語ブロックはその段階で「実施設計」に加わった。「実施設計」時は独立のテーマとして「アイヌ語」の展示は存在していたので、その展示に関するハンズオン展示としてアイヌ語ブロックは計画していた。しかしより本格的に展示を作っていく段階になり、他のテーマとの兼ね合いやスペースの都合により、無形文化の他のハンズオン展示と共に、ひとつのコーナーにまとめることになった。アイヌ語ブロックの本体はプラスチック性の6面体で、文を構成する副詞句、名詞句、人称接辞、他動詞の4つのブロックから構成され、それぞれのブロックには色が付いている。各ブロックの面には、単語が書いてある再剥離シールが貼られている。そしてブロックは4つがちょうど収まる台に置かれていて、その台にもブロックと同じ色のシールが貼ってあり、そのシールの色が正しい語順を示している。

カ) アイヌ語ブロックのパネル

アイヌ語ブロックのパネルは3つあり、タイトル、作文の例、アイヌ語の発音と表記について掲示している。タイトルのパネルでは、ブロックを組み合わせていろいろな文を作ることができることを紹介し、どこの方言の単語を使っているのか明示している。作文の例のパネルでは、アイヌ語の日本語への訳し方、日本語との違いを簡単に説明している。アイヌ語の発音と表記のパネルでは、日本語にはない発音とその文字表記について短い解説を行っている。

映像コーナー

さまざまな無形文化は文字で説明するよりも、実際に耳で聞いたり、映像を見る方が伝わりやすい。そのため、「実施設計」時から映像コーナーは展示の重点項目として計画されていた。映像コーナーは、一般向けの入門的なコーナー（映像1・入門）と、より詳しく知りたい人向けの初級者コーナーがある（映像2・初級）⁹⁾。映像資

料は1980年代から現在までの既存資料を用いている。出演者は北海道各地の方々と、年代も1910年代生まれから1990年代生まれまでと多様である。映像コーナーをアイヌ語という視点でみた場合、アイヌ語特有の発音や短い会話のやりとりのようなコンテンツはないが、口承文芸はすべてアイヌ語で語られているため、アイヌ語を聞くという体験ができるコーナーであると言える。

キ) 映像1・入門

映像1・入門では、アイヌの口承文芸、歌、踊り、楽器がどういうものかがわかる映像が見られる。映像は1分程度で、コンテンツ数は6である。アイヌ語で語られた口承文芸のテロップはすべて日本語である。

ク) 映像2・初級

映像2・初級では、アイヌの口承文芸、歌、踊りについてのさまざまな映像が見られる。コンテンツ数は23である。特にアイヌ語に関係するコンテンツは2つある。1つめはアイヌの口承文芸の音声資料を用いて、NHKのみんなのうたとカラオケを合わせたアニメである。ここでは、音声に合わせて日本語訳の字幕が変わっていく仕組みになっている。もう1つはアイヌ語で語られた昔話全部を聴けるコンテンツである。ここでは、場面に関係する民具や風景といった写真が順に表示されるなかで、アイヌ語の語りが流れ、下にアイヌ語字幕や日本語訳の字幕が表示される。アイヌ語字幕だけか、日本語字幕も入れるかは最初の画面で選択できるようになっている。

第3章 第2節 アイヌ語の展示を考えた際の基本的な考え方

展示構成を練る前に行ったことは、来館者はどのような人たちになるのかを想定することであった。まず日本語の一部の方言や大言語（英語、中国語、フランス語など）ならば、来館者はその言語を話したり、聞いたりした経験があるだろうが、アイヌ語の場合は話したり、聞いたりした経験がないこと。そして次に、ここ数年の状況の変化や経験から、アイヌ民族には独自の言語があることや、北海道の大部分の地名がアイヌ語に由来するといった知識を持った来館者は比較的にいること¹⁰⁾。さらに近年はアイヌ語を教えることができる人からアイヌ語を学んだり、出版されている教材を使ってアイヌ語を学ぶアイヌ民族の若者が若干増えつつあるため、そうした人たちが来館するだろうこと。最後に、大多数の人は学校教育を含む社会生活のなかでアイヌ語に触れたり、学ぶ機会は決して多くはないと思われるため、アイヌ語の構造といった中身の部分を知っている人はまずいないことの4つである。

報告するにあたり、以上の想定を来館者属性と捉え、筆者の経験から来館する比率が高い順に並べて整理すると次のようになる。

- ①アイヌ語は、話す、聞くといった言語体験を有していない。
- ②言語体験もなく、アイヌ語の言語外的な情報（歴史や社会状況）も知らない。
- ③言語体験やアイヌ語を学習したことはないが、言語外的な情報は知っている。
- ④学習により、アイヌ語がどういう感じかある程度知っている。
- ⑤言語学一般の知識もあり、アイヌ語の構造をよく知って、教えることが出来る。

⑤はアイヌ語研究者やアイヌ語を教えることができる人であるから、来館者の大多数が①～④である。当時上記のような整理を明文化していた訳ではないが、公立機関の立場から①～④の属性を持つ来館者をターゲットにして展示を考えることが必要不可欠であると考えていた。そうした来館者属性から展示内容を考えると、大きく「言語体験」「言語外的情報」「言語内の情報」という3点が必要な要素であろうと考えた。各要素のキーワードと主な研究分野を添えて整理すると以下のようになる。

A. 言語体験

キーワード：話す、聞く、感じる、学ぶ

研究分野：言語教育学、応用言語学

B. 言語外的情報

キーワード：歴史、方言、社会状況

研究分野：歴史言語学、社会言語学、方言学、研究史

C. 言語内の情報

キーワード：音声、文字、形、文法

研究分野：音声学、音韻論、形態論、統語論

言うまでもないだろうが、先にまとめた「使命」に対して、言語学の研究分野で最も貢献が期待できるのは、上にまとめた研究分野でいうと、応用言語学や言語教育学である。筆者は公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構からの依頼や大学の非常勤講師などでアイヌ語を教えた経験はあるが、研究としては形態論、統語論、方言学をおもに行い、言語教育や応用言語学に関する知見はゼロに等しい。また学生時代は言語学を専攻しており、就職先を考えた場合、学芸員資格を取ることに利点や魅力を感じなかったため、博物館学関係の講義は全く履修していない。つまり、言語学で最も貢献が期待できる学問分野についての知見が乏しく、博物館学に触れたことがないなかで展示構成を練らなくてはならない状況に

あった。筆者の勉強不足と言えばそれまでであるが、そうした点が展示作成者の側の前提としてあったことを、今後の検証材料としてここで報告しておく。

第3章 第3節 北海道博物館のアイヌ語展示の自己点検

それでは、第2章で整理した「使命」のどこに資するものとして、北海道博物館のアイヌ語に係わる各展示を構成したのかを、展示を作るうえで付き物である収捨選択の部分も交えて、自己点検的に報告しよう。

まず、第2章で紹介した北海道博物館におけるアイヌ語展示の使命に対する考え方を筆者なりにどのように整理したかであるが、使命Ⅰは資料の保存・活用ということに尽きるとはいえ、前半の「保存・伝承し」の部分は博物館の資料保存と調査研究を指し、後半の「未来に活かす」は、情報提供から始まる伝承活動への支援、教育普及、展示を指す。つまりアイヌ語の展示において重要なのは「未来に活かす」に寄与することであると考えた。そして、博物館にはさまざまな年齢層の方が来館されるが、「未来に活かす」観点からみると、低年齢層から若年層がまず第一に来て、中年層以降はその活動を支援する状態が理想であると考えた。次に、使命のⅡは「正確な情報に基づいた展示」、最後の使命のⅢは「実施計画」で以て館内の考え方が整理されていたが⁽¹¹⁾、「言語展示」としては、展示のアクセントとして可能な部分で実施するという整理を行った。

それでは、各展示について報告していくが、便宜上、3.1節で概観したアイヌ語にかかわる各展示に沿って、おもに焦点を当てた使命と前節でまとめた展示要素を整理した表を提示する。なおアイヌ語ブロックについての部分は、次節で行う。

展示内容		使命	展示要素
ア) 中テーマサイン	本体	Ⅰ	B
	写真	Ⅰ	B
イ) 中テーマ解説付	解説	Ⅱ	B
	図	Ⅱ	B
ウ) 詳細解説	解説	Ⅰ	B
	写真	Ⅰ	B
エ) トピック解説	解説	Ⅱ	B
	図	Ⅲ	B
オ) アイヌ語ブロック本体		Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ	A, C
カ) アイヌ語ブロックのパネル	パネル1	Ⅲ	A
	パネル2	Ⅱ, Ⅲ	A, C
	パネル3	Ⅱ	A, C
キ) 映像1・入門		Ⅰ, Ⅲ	A
ク) 映像2・初級		Ⅰ, Ⅱ	A, C

「ア) 中テーマサイン」では、使命Ⅰに資するものとして、広い意味でのアイヌ語史に相当するところから、2つの資料を選択した。未来に活かすという観点からみ

れば、子どもたちがアイヌ語を学習している風景や認知度の高いイベント等で披露されたアイヌの踊りなどもあり得ただろう。その中で二谷国松氏が遺したノートと八重九郎氏が物語を語っている姿を選択したのは、そういった世代の活躍があったことを低年齢層と若年層に伝えることに重きを置いたからである。

「イ）中テーマ解説付」は使命Ⅱに資するものとして、Bの中でも歴史言語学、社会言語学の分野から解説を行った。ただし解説ではアイヌ語の外的な情報がゼロの来館者に、どこまで伝えて、新たな関心を促すかについて、適切な情報量と質を吟味した結果、ある程度情報を絞った。例えば、明治期から大正期の資料からわかる話者数の変遷や、アイヌ民族を取り巻く情勢の変化や国全体での言語政策上の問題など、現在アイヌ語が直面している社会的な課題を理解するための解説は入れていない⁽¹²⁾。それらを入れなかったのは、適度な情報量の判断以外に、正確且つ客観的な解説を行うには学術的な調査や研究が乏しいという質に関する判断もあった。

「ウ）詳細解説」の使命と展示要素の対応は、「ア）中テーマサイン」と同様である。ただし、展示内容を近現代の状況に絞ったことにより、近世から近代にかけての文献資料や海外資料の紹介は行えていない。じつは、展示構成を練る初期の段階で考えていた資料の一部は、近世から近代を扱っている他のテーマで展示することになり、重複を避けるために断念している。そうした分野との共同展示はこれからの課題といえるだろう。

「エ）トピック解説」は、使命ⅡとⅢに資するものとして方言学の分野から展示を考えた。展示されている「単語にみる地域差」の図では、サハリンを含む19地点の4つの単語の示し方について、使命のⅢ-2と3に資することを意図した工夫を行っている。具体的には、各データを整理すると6つのパターンとなるため、6つのパターンを表にまとめた上で、それぞれ別の記号を付け、地図上の19地点を地名と共に各パターンの記号で示すというものである。そのようにしたのは、一見単に記号だけの地図であるが、地図上に示された記号から単語の表へ、その表を見てから上の単語との違いを観察し、さらに地図上でその記号を探す。または地名から単語を探す、といった自身の関心で観察を楽しみ、発見するという感じで地域差を体感できるようにしたいと考えたからである。しかし、「言語」と「方言」や使用した資料の詳しい説明は行えていないため、意図していた地域差やそうした表現手法が来館者にとってわかりやすいかどうかは今後検証する必要があると考えている。

「キ）映像1・入門」は、さまざまな世代がアイヌ文化を伝承してきていることを年齢層を問わず、気軽に映像を見ることができるよう、映像をコンテンツを選択

している。コンテンツの検討で第一に考えたのは、低年齢層や若年層にとっても、物語や歌の特徴がわかりやすいかどうかである。つまり、使命のⅠとⅢに資するものとして、Aの言語体験ができる展示を考えたことになる。ただし、字幕はすべて日本語である。多言語使用にできなかったのは、それぞれに応じた字幕を用意するところまで手が回らなかったからである。

「ク）映像2・初級」は、さまざまな世代の人たちがアイヌ文化を伝承してきていることを低年齢層と若年層に伝えると共に、少し詳しく知りたい人向けにコンテンツを選択している。またアイヌ語字幕やカラオケのような日本語字幕を用意したのは、そうした人たちに字幕を見ながらアイヌ語の音を聞いて頭の中で音を分節化していく作業を体験してほしいと考えたからである。そのような意図があり、アイヌ語字幕については、単語の区切りやアイヌ語の表記など、言語学的な注意を払いながら、いかにしたらわかりやすくなるかという点について実験的なことも行っている。他と同じように使命と展示要素をまとめると、使命のⅠとⅡに資するものとして、AとCの要素で展示を行ったということになる。しかしながら、アイヌ語音声と日本語訳の字幕という組み合わせは、洋画を見る環境と同じであり、そうした組み合わせが言語教育としてどこまで効果があるのかについて、専門領域の研究を参考するまでには至らなかった。そのため、今後も同じようなコンテンツを作成するならば、言語教育や応用言語学の研究成果を積極的に取り入れて、考えていく必要があるだろう。

第3章 第4節 アイヌ語ブロックの要素

アイヌ語ブロックのコンセプトは、「子どもたちが、楽しみながら感覚的にアイヌ語の語彙や文法に親しめる」である。使命については、使命ⅠとⅡに資することもあったが、使命Ⅲに資することが最優先事項であった。展示内容の要素はAからCまで入っていた。Aの言語教育または応用言語学的な対応策は展示手法ということもあり、4章でまとめて報告することとし、この節では展示内容BとCについての取捨選択を主に報告する。

(1) 発音と文字

アイヌ語ブロック本体と紹介パネル2、3では、アイヌ語をローマ字とカタカナで表記し、発音と文字などの説明は必要最低限にするという方針を立てた。必要最低限というのは、来館者が短時間で感覚的に理解できて、ブロックにある文字を読んで、アイヌ語の特徴を捉えるのに必要な情報を選択したという意味である。誤解がないように補足すると、必要最低限という方針は、単に複雑な説明を要するものは省くという消極的な考えからで

はなく、限られた時間のなかで館内のさまざまな展示を見るなかで、来館者に比較的長い時間ブロックに触れて頂いたうえで「アイヌ語ってこういう感じなんだね」という印象をしっかりと持ち帰って欲しいという考えに基づいて立てたものである。以下の内容についても必要最低限という方針によって取捨選択している。

(2) 発音とアクセント（展示内容C）

発音については、自己観察で理解しやすい音節末の[s]を解説している。けれども、特に発音が難しい音節末のp、t、k、rについては注意を喚起するに留めた⁽¹³⁾。そのようにした理由は、解説を読んで発音をしてみたとしても、それを自分で観察しただけでは正しい発音なのか、判断できないからである。じつは、独立のテーマとしてアイヌ語の展示を考えていた時点では、アイヌ語のpの発音の参考になるイラストを用意していた。しかしアイヌ語ブロックのコーナーで発音を説明することになった時点で、上記のような理由が決め手となり、イラストは挿入しなかった。またアクセントについては、比較的理解しやすく重要度は高いが、人称接辞が動詞にいた場合にアクセントの移動が起こる場合があり、少し複雑な説明を要する。そのため、短時間で説明を理解して、正しいアクセントでアイヌ語の文を発音するのは一般の来館者に対してはハードルが高く、とっつきにくくなると考え、アクセント規則の説明やアクセント記号を使った表記は行わなかった。

(3) 音声と文字の関係（展示内容C）

ある言語の音声と文字によって簡略的に表記しようとした場合、どのような音韻論的なステップを経て、ある一定の表記に辿りつくのかは、一般的に理解されているとはいえない。そのため、音声と文字の関係は研究成果を社会で共有する観点からすれば、必要性がある事柄であると考えられる。しかしながら、アイヌ語の表記法の説明には不可欠であるが、実際問題としてはかなり専門的な説明を要するうえに、アイヌ語ブロックの文字を読むのに必要不可欠な事柄ではないため、説明を行わなかった。

(4) 表記法とそれまでの過程（展示内容BとC）

現在アイヌ語を表す表記法として、ローマ字かカナ文字を用いた表記法が広まっている。カナ文字は、音節末の子音[p]を表す「プ」など、カナ文字からアイヌ語にあった文字が考案され、基本的な表記の規則も考案されている。しかしパネルでは、表記法が出来ていく過程とその原則の説明を行わないまま、ローマ字とカナ文字を用いている。「アイヌ語って、文字がないんですよね」

という声を一般の方からよく聞くため、今後の展示で何らかの対策を行いたいと考えている。その際は、アイヌ語だけに話題を絞るのではなく、言語学の研究成果を社会で共有する観点から、世界の言語全体でみた場合どうなのか、そうした言語はどういった言語で、現在はどうなっているのか（言語法や話者人口など）なども交えながら説明する必要があると考えている。

(5) 文法

アイヌ語ブロックの紹介パネル2では、メインの説明でブロックを並べるとこのような文ができて、それを日本語に訳すようになります、ということが、また、補足的な説明では人称接辞と名詞のブロックの訳し方が説明されている。そのように情報を絞ったのは、前節と同じ理由で、必要最低限の方針による。

アイヌ語ブロック本体にとっての大きな問題は、楽しみながら感覚的にアイヌ語の語彙や文法に親しんでもらうために、4つのブロックが常に文法的になるように工夫することであった。工夫した点を報告するまえに、理解に必要なアイヌ語の特徴を2つ説明する。

アイヌ語の人称

アイヌ語は「私が」「私を」「あなたが」という人称を常に動詞につけて表現する。そのような形式は、動詞の人称接辞と呼ばれ、動詞に接頭する場合もあるし、接尾する場合もある。また「が」「を」といった文法関係は動詞の人称接辞で表され、その種類は主格と目的格の2つである。時には、人称接辞が動詞の前と後ろに2つ付いたり、前に2つ付くこともある。方言によって動詞への接続の仕方や種類など、人称体系が異なることもある。なお、人称や数、そして文法関係はすべて動詞につく人称接辞で表されるため、英語のIやyouのような人称代名詞は必要がない限り文中で表現されない⁽¹⁴⁾。

抱合

抱合とは、名詞と動詞を結び付けて一つの単語を作る文法現象である。例えば、(1)の「私は魚を獲る」という文ならば、(2)のように、名詞と動詞が結び付いて「魚獲る」という単語になる現象のことである。なお(1)のkoyki「獲る」は目的語をとることができる他動詞であるが、抱合により自動詞となる。

- (1) cep ku=koyki.
魚 私が・獲る
- (2) ku=cep-koyki.
私が・魚-獲る

抱合で一般的に見られるのは、自動詞の主語と他動詞の目的語であると言われている（佐藤 2008：225）。ただし抱合にも条件があり、人名や地名といった特定性の高い名詞は抱合することはできない。

それでは工夫した点を順に述べていこう。まず、ブロックの種類については、副詞句、名詞句、人称接辞、他動詞を選んだ。そうした選択をしたのは、アイヌ語に初めて触れる際には、疑問文でも、命令文でもない普通の「平叙文」の文型が適切で、そこでも文のバラエティを豊富にしたいと考えたからである。その次からが特に工夫が必要なところで、アイヌ語には人称接辞や抱合現象があるため、適切な人称を選んで、ブロックの組み合わせを制限するが必要があった。

人称接辞の選択にあたっては、方言によって人称体系が異なるため、他の語彙を選択していくことを見越しつつ、アイヌ語ブロックにとって適切な方言を選ぶ必要があった。そこで、一人称主格の人称接辞の付き方、辞書や語彙表が確実にあるところ、という2点を筆者の経験から選択の基準とした。一人称主格の人称接辞の付き方は、北海道内全般で単数がku=、複数ci=であるが、辞書や文法書が出版されている沙流方言と千歳方言においては、i以外の母音で始まる動詞ではk=、c=となる。アイヌ語ブロックとしては一定であることが望ましいため、沙流方言と千歳方言を断念し、一人称主格を常にku=とci=で考えることができ、アイヌ語の文法書と信頼ができる辞書もあり、さらに多くのテキスト資料がある胆振方言を選んだ。

次に行ったことは、人称体系の中からブロックに適した人称を選択することであった。人称接辞のブロックは1つだけであるので、動詞の前後に人称接辞が付いたり、前に2つ付くタイプは最初に選考外とした。そしてアイヌ語に初めて触れる際にどこが適切なのかを考え、ブロックは六面体であるため動詞に接頭する主格と目的格を3つずつ選んだ。

残る問題は抱合と語順である。普通にいうところの語順の問題の他に、アイヌ語特有の問題として、先に触れたような人称接辞と抱合が関係する語順の問題がある。順に説明すると、名詞を抱合すると、動詞は自動詞になるため、目的格の人称接辞を付けることはできない。また1人称主格の複数形は、他動詞では動詞に接頭するci=であるが、自動詞の場合にはci=ではなく、動詞に接尾する=asという別の形になる。そのため、来館者が自由にアイヌ語ブロックを並べ替えられるようにしてしまうと、(3)や(4)のような文法的ではない文ができてしまうことになる訳である。

(3) en=TAROU-koyki.*

私を・太郎・獲る

(4) ci=cep-koyki.*

私たちが・魚・獲る

(3)は、特定性の高い人名の抱合と、自動詞には付

かない一人称目的格の単数形人称接辞en=「私を」が使われている点が非文法的である。(4)はcep「魚」を他動詞koyki「～を獲る」の中に取り込んだ自動詞cep-koyki「魚獲る」に他動詞に付く一人称主格の複数形人称接辞ci=が付いている点が非文法的である。この問題は人称や動詞の選択では解決できないため、次章で報告するような、アイヌ語ブロック自体に組み合わせを制限する工夫を行うことにした。

第4章 アイヌ語ブロックを展示するにあたっての工夫

アイヌ語ブロックの最後の課題は、ブロックの組み合わせを制限するために、ブロック自体に工夫を凝らすことであった。とはいえ、すべてのブロックは六面体というのが基本軸である。それがなければ、例えばパズルのように、一つ一つの形状を変えて、正しい場合のみ組み合わせるようにするとか、リブロックのように凸凹を設けて、正しい場合のみしっかりとハマるような仕掛けをするといった方法もあり得ただろう。しかしその方法では、複雑な設計が必要になるうえにバリエーションの数を確保するために、作成する量を増やす必要がある。従って、展示場に設置して、楽しみながら感覚的にアイヌ語の語彙や文法に親しんでもらうアイヌ語ブロックのコンセプトから乖離してしまう恐れがあるため、その路線での工夫は行わなかった。そして残る方策として考えられたのは、リブロックのようにブロックに色彩の情報を加えて、それを使って組み合わせを制限するための工夫を行うことであった。

まず色彩の選択であるが、子どもたちを対象として設定しているため、アイヌ語ブロックのなかでもどこを最初に注目して、手に取って欲しいかを考え、それに合った色を選択する必要があった。筆者はそれに対応できる応用言語学や言語教育などの知識はなかったため、インターネットを使って子どもが好む色彩を検索した。検索閲覧したサイトの一つに、学研教育総合研究所が2011年12月におこなった小学生を対象として行ったインターネット調査があった。そのサイトではアンケート結果のグラフと共に、小学生の男子は「青」「赤」、女子は「水色」「桃色」を好む傾向があると記されていた⁽¹⁵⁾。筆者はアイヌ語ブロックの中でも動詞と人称接辞の關係に一番着目して欲しいと考えていたので、そのアンケート結果のグラフを参考にしながら、男女ともに好む傾向が一番高い青系（青や水色）の色を動詞、その次に好む傾向が高い赤系（赤や桃色）の色を人称接辞の色として選択した。名詞句は着目して欲しい人称接辞を主格にするか目的格にするかで、訳し方が違ってくるため、青系

と赤系の次に男子に好まれる緑色を選択した。最後に残っている副詞句は、青系や赤系の次に女子に好まれる黄色を選択した。ちなみに、全体で緑と黄色を見ると、緑は青系や赤系の次に好まれ、黄色は緑、黒、紫の次に好まれる色である。

色彩が決まり、次に組み合わせを制限する工夫を考える訳であるが、「黄色」「緑」「赤」「青」が正しい順番であるため、その順番を常に保持できる工夫が必要とされていた。さらにブロック本体のみが展示場に置かれた場合、ブロックが散乱したり、紛失するようなことも考えられるため、メンテナンス上の工夫も必要不可欠であった。つまり、順番を保持するための枠を用意して、遊ぶ場所を限定し、さらに視覚的にその順番で正しいのか判断できる工夫が求められていた訳である。そうした条件をクリアするため、ブロックを置く台を設置することを考え、ブロックの色と同じシールをブロックの下に貼り、さらにブロックの前も同様にシールを貼ることにした⁽¹⁶⁾。

ブロックの各面に貼られている単語のシールについて少し触れておくと、単語のシールは再剥離シールを使用している。しかし、一度にすべての単語のシールを貼り替えると、解説パネル2で説明している作文の例と異なってしまうため、来館者が困惑する可能性がある。そのため、作文の例として使っている単語を除いて貼り替えることを考えている。

以上がブロックの組み合わせを制限するための工夫である。その他に使命Ⅲに資するものとして考えたことが2点ある。1つめは、イラスト、2つめは、文のおかしさと名詞句の調整である。まずイラストから述べていくと、現在展示しているブロックには、イラストは名詞句と人称接辞のブロックのみしか入っていないが、「実施設計」ではすべてにイラストを入れることを考えていた⁽¹⁷⁾。そのように考えたのは、特に文字をしっかりと覚えていない幼稚園ぐらいの小さい子どもが意味を理解したり、時には同伴している年上の兄弟や両親の助けを得ながら意味を理解するという観点から、イラストは有効であると考えたからである。また、万能ではないがローマ字のアイヌ語表記に加えて、意味を表したイラストがあると、多言語対応の観点からも有効ではないかとも考えた。しかし、イラストを作成する段階になって、業者から副詞句や他動詞をイラストにするのは難しいという意見が上がった。けれども、その時は他の展示作業でその対応に手が回らなくなっていたり、展示作業が進んでいくにしたがい、業者との打合せはより緊急度の高い展示の方に時間を割くようになっていたため、副詞句と他動詞のイラストは断念した。

次に2つめの文のおかしさと名詞句の調整であるが、ブロックに表示する単語を選んでいく中で、何パターン

かは現実世界でもありえる自然な文になることを確認しながら行っているが、すべて自然な文にするのは不可能に近い。そうしたことは、言語の基本概念である統合関係と連合関係を利用してブロックを作成しているため⁽¹⁸⁾、自明のことではある。ただし、「統合関係」と「連合関係」の説明は、一般的に大学の言語学概論の講義などで説明を受ける概念であるため、それを限られたスペースでわかりやすく説明できるのか、さらに来館者が短時間で理解できるのかを考えた場合、かなりハードルが高い問題である。そのため展示においては、説明は必要最低限にするという方針に則り、おかしい文章ができて文法的には正しいことを第一に伝えるために、パネルでは普通の文章を取り上げ、細かい言語学的な概念の説明は省略した。とはいえ、ちゃんとした文やありえそうな文を作りやすくするためには、ある程度の調整は必要である。それゆえ、名詞句のブロックには動作主性が高い名詞（人間や動物）と動作主性の低い名詞（植物、道具など）がバランスよく入るように単語を選択している。

まとめると、イラストは使命Ⅲ-3「ユニバーサルな展示」に資するために考えたことであり、文のおかしさと名詞句の調整は使命Ⅲ-3を支えるための一つの工夫といえるだろう。最後に一点だけ課題を挙げると、アイヌ語ブロック（パネルを含め）に盛り込んだ「ユニバーサルな展示」は、年齢や興味性のレベルにおいてであり、母語や障がいの有無に関係ないレベルにおいて「ユニバーサル」な展示であるとはいえない。もしブロックを改良する機会があるならば、そうした点を加味する必要があると考えている。（田村）

第5章 博物館における「言語」展示

本章の目的は、筆者らの見聞の範囲で博物館展示における言語展示の事例を紹介しながら将来的な課題を含めて整理することで、歴史・民族学系博物館における言語展示を考える素材を提供することにある。そのため、第2章から第4章で報告した北海道博物館でのアイヌ語展示は、本章で紹介する事例と直接的な関連を持つものではない。つまり、第2章では構成上の理由から事後検討的に本章で取り上げる事例について分析を行っているが、そもそも北海道博物館の言語展示は、従来の博物館にみられる言語展示を十分に踏まえて、つまり旧記念館と旧道立センターに加えて多数の有識者を交えながら博物館展示論的な議論を重ねたその延長線上にある展示ではないし、また従来の展示の課題や問題点について批判的に検討を加え、それらを乗り越えたところにあるものでもない。このことを、あらかじめ注意しておきたい⁽¹⁹⁾。

なお、この章は、「展示テーマとしての言語-国立民

族学博物館の例」の報告を北海道博物館の展示制作後に同館を訪れた田村が担当し、田村の私見をもとに構成している。それ以外の部分は、出利葉が担当し、出利葉の私見をもとに構成している。出利葉は博物館における言語展示の詳細な歴史をたどることができる資料をそろえてはいないが、ここ20年ほどのあいだに気付いた展示をもとにした簡単な報告を行う。ただし、それらの言語展示例は、博物館展示における言語展示が、ある方向に向かって変わってきていることを示すものではない。筆者らがこれまで確認してきたいくつかの展示について、気付いた点を記載したものである。「展示史的」にみて、それぞれが相互になんらかの連関、脈絡があるのかどうかについては、確認してはいない。したがって、北海道博物館のアイヌ民族文化研究センターとしての公式の意見ではない。また、本章最後になる6節の小括部分は、田村との協議のもとに出利葉がとりまとめをおこなっている。

第5章 第1節 博物館と「言語」の関係

一般的にいった、これまで博物館において、「言語」の「展示」は、どのようにおこなわれているのだろうか。とくに少数者の言語あるいは標準語の周辺に位置する言語については、どうであろうか。

筆者らの管見によれば、博物館展示において「言語展示」をおこなっているところは、多くはない。十分な検証をおこなってはいないが、ひとつには、少なくとも日本の博物館が器物や動植物標本を中心に収集し、それを展示してきたことと無関係ではないであろう。いま筆者の手元にあるいくつかの博物館学教科書をながめても、言語展示を正面から取り上げ、その課題などを議論したものはみあたらないようである。たとえば日本の博物館のなかでは「民族」言語や日本の方言についての先駆的な「音声による」展示をおこなった国立民族学博物館にながく在籍しておられた中村たかを氏編集による教科書『博物館概論』でも、言語展示はとりあげられていない(中村 1992)⁽²⁰⁾。海外で出版された教科書類にも、言語展示については詳細な議論はないようである⁽²¹⁾。

原則論的にいった、博物館展示と「言語」との関係というならば、博物館の展示自体、「言語」とは無関係ではない。詭弁的にきこえるかも知れないが、展示物には説明が付され、さらになんらかの解説がなされるのが普通だからである。もっとも、博物館展示において、まったく説明のない展示を理想とする意見がないわけではない。筆者らが確認しているところでは、佐原真が、理想として提案している(1987)。現実として、文字のない展示を確認してはいないので、いまは佐原の提案する理想論は考慮しないでおく。

もちろん、「言語」それ自体を展示対象化し、なんらかの方法で展示物化することと、展示物になんらかの説明をほどこすための「ラベル」(題簽、ネームプレート、キャプションなどと表現される。ここでは、ラベルで統一しておく。)や「解説文」を展示物とみなすこととは、質的に同一視してよいかどうか議論があるだろう。それを承知のうえで、あえて、次節から「言語展示」を紹介し整理していくするなかで、「言語展示」の範囲を広げて「ラベル」や「解説文」に言及するのは、目的論から考えていきたいと思うからである。

第5章 第2節 展示の「解説文」をどの言語で表記するか

展示が、ある言語のもとにおこなわれる以上、意識するしないにかかわらず、そこでは、なんらかの言語が使用される。ふつう説明という形態をとるが、じつは、その言語が、社会的に使用されている、つまりある社会のなかで、その言語によるコミュニケーションが成立していることを、同時に示唆していることになる。

この観点から、言語展示を眺めたときに、解説文やラベルにおける使用言語が、まず議論されてもよいだろう。この観点に立って、筆者らが気付いた例をいくつかあげてみよう。

カナダ国立文明博物館における極北地域先住民の言語による解説の例

カナダの首都オタワの対岸、ケベック州ハルにある国立博物館。2013年にカナダ歴史博物館(Canadian Museum of History)と名称を変更している。筆者のうち出利葉は、1990年と2005年(国立文明博物館 Canadian Museum of Civilization時代)にここを訪問する機会をえている。カナダは、多文化主義を打ち出した国家であるが、ここの展示解説文は、英語、フランス語のほかイヌイトの人びとの言語(正確にいうといくつかの言語に細分されるようであるが、ここではイヌイト語と総称してお記述しておく)で表記されている。前二者はカナダの公用語であるが、ヌナブト準州とノースウエスト準州では、イヌイトの人びとが話す言語も公用語となっている⁽²²⁾。(写真2)

国立の博物館であるから全カナダ国民が対象となっている。とくにオタワのある東部地域はフランス語話者もおおく、民族問題もあることをかんがえると、フランス語による解説は十分にその機能を果たしているであろう。それではイヌイト語はどうであろうか。カナダの人口から考えたとき、どれだけのイヌイト語話者がこの博物館に来館するのだろうか。

イヌイト語が公用語になっているとはいえ、おそらくイヌイト語の表記をここではじめて目にする来館者も多いのではないかと推察する。そのような来館者にとって、このイヌイト語表記による解説文は、展示の解説としての「本来の」機能としてよりもむしろ、イヌイト語の存在を意識させるものとして機能するのではないかと思う。

ただし、このイヌイト語表記による解説は、通常の解説文のように「解説文プレート」として印刷されている。その限りにおいては、博物館実践からみて当然のことであるが、それがイヌイト語であることのほか、その言語系統や文法、話者にかんする情報など「言語学的な説明」は一切ない。海外からの旅行者も含めて、一般の来館者にとっては、イヌイト語およびその表記文字についての事前の知識はまったくといってよいほど、ないだろう。だから、説明を受けない限り、それがイヌイト語であることに気付く来館者も、きわめてすくないと思う。

国内博物館における「アイヌ語」での解説例

国内に目を転じて、展示会でアイヌ語の解説をおこなった例をふたつあげておきたい。

1993年は『世界先住民年』年であり、国立民族学博物館（以下、民博と略す）、東京国立博物館という二つの国立博物館をはじめとして、いくつかの博物館で記念展示会が開催されている。民博での例『アイヌモシリ 民族文様からみた世界』は、アイヌ民族の現代作品にも目を向けた展示会であったが（1993年6月～8月）、筆者らが注意したいのは、展示会の「あいさつ」文が日本語、アイヌ語の両言語で表記されたことである。このアイヌ語表記は、同展示会の図録でも掲載されている（国立民族学博物館編 1993）。萱野茂氏が専門委員会のメンバーであり、同氏がアイヌ語文を担当されている（国立民族学博物館編 1993；6）。

出利葉がこの展覧会を観覧した限りでは、それがアイヌ語であることなどの説明や、その文章の作成者についての説明はなかったと記憶している。

北海道でも、アイヌ語による解説をおこなった展示会がある。1993年に、（社）北海道ウタリ協会（当時、現在の北海道アイヌ協会）が主催して、札幌市中央区のカデル2・7展示ホール（9月）および旧記念館（10月）を会場に開催された『ピリカ ノカ アイヌの文様から見た民族の心 PIRKA NOKA』展がそれである。この展示会は、前記の民博での展示をご覧になった当時の北海道ウタリ協会（現、北海道アイヌ協会）の野村義一理事長ほか理事の方々が、現代作家の作品展示などに感銘を受け、同様の展示会の道内での開催をつよく望まれ、国際先住民民族年記念展として、北海道内での展示会の開催

を提案され、急遽、開催が決定したものであった。実行委員会を立ち上げて企画が検討されたが、設立間もない旧道立センターからは古原敏弘研究課長（当時）が、旧記念館からは出利葉と亀谷隆（当時、展示担当学芸員）が、実行委員として参加している。なお、実行委員長は秋辺得平（ウタリ協会理事・教育文化部長、道立センター運営協議会委員、どちらも当時）であった。

この展示会でも、「アイヌ語」による解説を試みた。これは開催の数年前に、前記のカナダ国立文明博物館でのイヌイト語解説文をみた出利葉が、それをヒントに実行委員会に提案したものである。

ただし、この展示会では、民博での方式とはことなり、アイヌ語で解説を試みたのは「あいさつ文」だけではない⁽²³⁾。といよりもむしろ、展示の中心となる6つのテーマ（「彫りと縫いの対話」、「縫う」、「彫る」、「伝統を受け継ぐ」、「多様な創造」、「現代に着用」）ごとの解説文をすべてアイヌ語で併記するという試みをおこなった。ただし、この展示会のアイヌ語解説において、アイヌ語それ自体の説明、解説文にアイヌ語を採用した理由などは、いっさいおこなわれてはいない。

出利葉は、この展示会では、あいさつ文だけではなく、展示の内容そのものをアイヌ語でも解説することを実行委員会で主張したことを記憶している。アイヌ文化にかんする展示会であっても、博物館展示が「現代」の文脈におかれている以上、その現代的文脈のなかで意図が考えられ、それに基づいて説明がなされていく。そして、そこで使用される言語は、その社会でコミュニケーション可能な言語である。この展示会における準備段階では、日本語（の標準語）ということになるであろうか。この日本語で語られる「現代」という文脈が、アイヌ語でも説明可能であることを示すということが、出利葉がこの展示会でアイヌ語解説を主張した意図であり、すくなくとも実行委員会において賛同していただいたことであった。

同年、道立アイヌ民族文化研究センター（現、北海道博物館と統合）が開設され、アイヌ語を専門とする研究者も職員として勤務することになった。同センター大谷洋一、奥田統己氏らが解説文のアイヌ語翻訳をおこなっている（社団法人北海道ウタリ協会編 1994；8）。そして、このときのアイヌ語解説文は、ローマ字表記であった⁽²⁴⁾。これは、現在のようにワードプロセッサで簡単にフォントの書体やサイズ、文字数を設定できる状況ではなく、時間的なこともあり、校正などの困難を考慮したうえで、送られてきた完成原稿をそのまま拡大コピーして掲せざるを得なかったからと記憶している。当時、展覧会終了後に、出利葉が個人的に受けた報告では、当時、アイヌ語が理解できる方々がご健在であり、カタ

カナ表記であれば、その方々も理解できたということであったことを記しておきたい。

なお、タイトルにアイヌ語をもちいた展示会として、旧記念館では小規模ながら二度の展示会（テーマ展示）をおこなっている。2007年1月におこなった『北の手仕事-テケカラペ ヌカラ ワ ウンコレ ヤン-（作ったものをみてください）』と、2011年1月におこなった『北の手仕事 これから・・・カンナ イカラカラアシルウェタパンナー（また、あたらしいものを作りました）』展で、どちらもアイヌ文化を学び継承する女性の会（カリブ；会長 上武やす子、事務局長 津田命子）の協力をえて、同会会員が制作した染織作品を展示したものである。旧記念館側は、出利葉浩司、手塚薫（2007年のみ、現在北海学園大学教授）、田村将人（現在、文化庁伝統文化課）が企画を担当したが、とくに展示会のタイトルをアイヌ語でも表現することについては、カリブの会と旧記念館側とが協議し、賛同をえたうえで、田村将人がアイヌ語研究者の助言を受けながら「作文」したものとなっている。

以上の事例から博物館における「言語展示」を考える上で重要なポイントを整理すると⁽²⁵⁾、「言語展示」の対象となる言語の社会的・政治的な地位（その国の言語政策や多言語主義を受け入れる国民全体の意識なども含む）、そしてそれに付随して言語体験を有する来館者がいること、そして最も重要なのはその言語に対してアイデンティティを持っている人たちの意識とその尊重、以上の3点に整理できるのではないだろうか⁽²⁶⁾。言うまでもないが、そうした課題は博物館展示の外にある問題である。本節の主な構成は、出利葉の私見をもとに主に表記の問題に触れる構成となっているのは確かであり、そうした課題やそれに付随する問題をすべて紹介することは出利葉の力量を超えている⁽²⁷⁾。けれども博物館も、ある主要な言語が確立している社会のなかに存在し、その言語によるコミュニケーションが成立している状態のなかでさまざまな事業を展開している以上、将来的には大きく議論されるべき問題であると考えている。それゆえ、出利葉が「現代」という文脈が、アイヌ語でも説明可能であることを示す意図を以て『ピリカ ノカ』展でアイヌ語による解説を提案した点と、イヌイト語の事例と比較検証した場合、議論すべきさまざまな問題が析出してくることは承知しており、その批判や指摘は真摯に受け止めたいと考えている⁽²⁸⁾。（出利葉）

第5章 第3節 展示物のラベルをどのように表記するか

博物館の展示では、ふつう各展示物にそれぞれの名称や使用地や年代、収集地、資料としての意義を説明をす

るためのラベルが付される。

資料名称についていえば、標準名や標準語による名称、あるいはその機能を示すための説明的な名称が採用されることが多いように思う。器物によっては、その形態からそれがどのような機能をはたすものなのかを理解できることもあるが、そうでない場合もある。そのときに、来館者に、まずその展示物がなんであるのかを理解していただくことを第一義に考えて、標準的な名称が記載されることになる。さらに、その資料が、ある地域でどのように呼び習わされているか（呼び習わされてきたか）についての説明がなされることもある。

博物館学とくに資料論の立場からいえば、博物館資料として登録、記録するときの名称として、資料名や原名、呼び名・方言名という専門的用語が使われることがあるが（たとえば、伊藤・森田編 1978など）、「地域によって呼び習わされてきた名称」は、そこでいう呼び名あるいは方言名にあたる。アイヌ語での名称やその方言、あるいは日本列島内でのさまざまな方言差もこれにあたる。ラベルの最初に、資料名称として記載されることもあれば、一般的な名称のあとに括弧書きで（あるいは級数をおとして）記載されることもある。ラベルに付される簡単な説明文のなかに取り込まれることもある。ここで、「ある地域を限って、その範囲で使用される器物の名称」について、それが方言における個々の単語と理解すれば、ラベルに記載される器物名称も、「器物と一体化した言語展示」と考えることは可能であろう。

例をあげると、北海道内の博物館では、除雪をするためのスコップ状のヘラが、積雪地域に特有の道具としてその地域性（地域的生活の特徴）を示すために展示されることがある。地域によっては「ジョンバ」「コスキ」などと呼ばれるようであるが、器物それ自体だけを見ても、さらにそれに「ジョンバ」などの名称（原名）だけが付されても、それが何に使う道具なのかは、観覧者には、とくに除雪の経験がない観覧者には、わからない。ここで、標準名称として「除雪具」「除雪用のヘラ」など、あるいは機能を示すものとして「除雪用具」などが、まずラベルに記されることになる。北海道の場合、原名は、どの地域から人びとの集団が移住したのかを示す指標となるばかりではなく、実際、現在でもこの呼称が使用されていることもあり、原名の表示は意味を持つ。

もうひとつ、本稿に関連する例として、旧記念館時代の展示（特に出利葉が主体的にかかわった第二世代展示）において、イクパスイ（ikupasuy）の展示をおこなったときの例をあげたい。この細長い篋状の器物は、民族誌例によれば、アイヌ民族が神々に祈りを捧げるときに使用する木製の篋で、ふつうはアイヌの人びとの自製である。儀式など祈りの行為をとまなう場面で使用されるが、

祈る人は、匱の基部を右手に持ち、その先端を酒にひたし、その酒をささげながら祈り言葉を語るのである。祈り言葉の誤り、不足を補いつつ、神々に伝える伝令者としての働きがあるといわれている。また、この道具自体、宝器とされて、負債を償うときにも使われたという。

この道具は、「アイヌ文化」をのぞくと、少なくとも筆者らが経験しているあるいは記録に見られる日本列島のほかの文化のなかには、存在しないものである。アイヌ文化の文脈では、重要な意味を持つ道具のひとつであり、多くの博物館では儀式や信仰にかんする道具のひとつとして展示されることが多いものである。

さて、この道具は、これまで研究者によって、「髭べら」「髭揚げべら」「搾酒匱」「酒搾匱」などの「日本語」名称が与えられ、また博物館などの展示や出版物でも、そのような名称が使用されてきたこともある。ただし、この名称が、この道具の本来の機能を表現していない、その一部しか表現しきれていない、あるいはまったく表面的な見方を記述したものに過ぎないことも、同時に指摘されてきたところである。

このような問題を認識したうえで、旧記念館展示では、上述した日本語での名称はまったく使用せず、「イクパスイ」というアイヌ語をもちいた。このイクパスイは、アイヌ文化をのぞくと、日本列島のほかの文化のなかには存在しないものであるため、日本語の「標準名称」が存在しない。さらに、あえて来館者に「日本語の名称」を覚えていただく意味がないことがその理由である。イクパスイというアイヌ語を、日本語による解説文というかぎられた状況のなかではあるが、これから日本語になろうとする「外来語」として記憶していただき、できるだけ日常会話のなかでも、イクパスイを使っていただくことを考えたのである。

ここで付け加えれば、もちろん、アイヌ語にも地方差があることは理解していた。このイクパスイという道具にしても、たとえば萱野茂氏は、著書『アイヌの民具』のなかで「トゥキパスイ」として紹介している（萱野1978:244）ことは了解していた。名称に地域的な差がみられる道具にたいして、どのようなアイヌ語で「代表」させるか。資料のラベルという限られたスペースのなかで、名称の羅列はできなかった。また、あえてひとつの名称を紹介することで、その名称が「標準化」することの危険性があることも承知していた。このような例としては、ほかにイナウ（inaw）があった。

資料の名称、とくに地方差ということからいえば、もうひとつ旧記念館が企画して余市町、栗山町で1999年におこなった移動博物館『アイヌの装い』展での例をあげてみよう。この展示会は北海道博物館が所蔵する伝統的アイヌ衣服の資料紹介を兼ねた展示会であり、個々の

資料についての個別的な情報が展示解説ラベルの主体となるものであった。これまでアイヌ衣服については、児玉作左衛門らの研究者が「命名」した日本語での名称が知られていて、博物館などでも用いられたことがある。たとえば、旧記念館での『アイヌの装い 文様と色彩の世界』展（1984年9月～11月）がそれである。例をあげると、噴火湾地方に多くみられるとされる色あるいは柄のある布で文様を形作っていく施文技法をもった木綿衣はに付された「色裂置文衣」「色布裂き置き文衣」「色裂置文様木綿衣」などという名称で呼ばれてきた。いっぽう、噴火湾地域の人びとが呼び習わしてきたアイヌ語での名称では、「ルウンペ（ruunpe）」が知られている。

この展示会では、展示資料のラベルに表記する名称として、研究者が命名した名称はもちいず、またアイヌ語での名称も用いてはいない。アイヌ語を採用しなかった理由は、アイヌ語による名称は地域によって違いがあることが知られており、いっぽうで展示された博物館資料はその製作・使用地が不明なものが多く地域の同定が困難であったためである。ひとつの資料にひとつのアイヌ語を宛てることで、「もの」と「名称」の一对一対応関係をつくりだすことによる「決定化」を避けようと試みた結果である。

かわりに、個々の資料に付されたラベルは、「あでやかな文様の衣服」「端正な文様の衣服」など、衣服の特徴をあらわした説明的なものとし、解説文中に、地域ごとのアイヌ語名称をできるかぎり記載することとした（これについては、図録、豆本が出版されているので、詳細はそれをご覧いただきたい。北海道開拓記念館編1999、2000など）⁽²⁹⁾。

以上の事例をもとに、やや乱暴ではあるが概略的に言ってしまうと、博物館の資料ラベルとして標準的な名称がまず暗黙裡にあり、つぎに地域による呼び名や方言名があり、最後にアイヌ語のような他言語が考えられがちであると言えるかもしれない。そうした考え方は、博物館という空間において、まず、誰もが理解可能な最大公約数的な名称を付し、展示物が何であるのかを示すことが資料ラベルに与えられた役割であるからであると言えるであろう。「言語展示」の範囲を広げて資料ラベルを見てわかることは、目的が異なるという点ではないだろうか。

第5章 第4節 音声展示としての口承伝承

旧記念館第二世代展示では、第二テーマ『アイヌ文化の成立』⁽³⁰⁾において、音声によってアイヌ語を展示場に流す試みをおこなった。アイヌ民族が伝えてきた物語のひとつで、ヤマバトの神がなげいまのような小さな姿になったのか、その来歴を語る『ワウオリ』が、千歳地方

で生活経験のある白沢ナベさんによるアイヌ語で、途中の省略なしで約15分にわたり展示場内に流れるものである⁽³¹⁾。センサーが来館者を感知することで音声の流れ始めるので、来館者は全員が「アイヌ語」を耳にすることになる。『アイヌ文化の成立』の展示メンバーは出利葉のほか平川善祥、海保嶺夫、手塚薫であり、出利葉がこの展示の企画に主体的に関わっていたので、以下に状況を記してみよう。

この音声展示の目的は、アイヌ語が、一般的な日本語話者が聞いて理解できる言語ではないことを知っていたくことにあった。つまり、アイヌ語が、日本列島内で話されているほかのどの言語（日本語の諸方言および琉球語や琉球列島の諸方言）とも異なっており、日本語の方言差のなかにはおさまりきらない「わからない」言語であることを、「聞き比べて」「感じ」ていただくことであった。

ただし、アイヌ語自体の説明は、一切おこなってはいなかった。アイヌ語について責任を持って説明できる職員が旧記念館内に不在であったことがその理由である。

ここで、数多くあるアイヌ口承伝承のなかで、なぜ『ワウオリ』をえらんだのかということについて、簡単にふれておくと、ワウオリが流れる展示テーマは『アイヌ文化の成立』という部分であったが、この展示はキーコンセプトとして「交易」という概念を明確に持っていたからである（このことについては、出利葉（2000）がすでに紹介している）。ワウオリのストーリーについては、いろいろと解釈はあろうが、このなかで語られるモチーフに、獲物であり交易品の象徴としてのアオバト（の神）、そしてその神が訪ねようとする場所をアイヌ社会と和人社会とを象徴的に二項的な対比で表現したものとしてとらえてみようとしたことが、その理由である。ただし、すくなくとも展示時点ではこの解釈は、展示を担当した歴史担当学芸員と協議したのみであり、アイヌ語および口承伝承の研究者とは議論していなかったため、展示のなかでは、そのことへの言及はおこなってはいない。また口承伝承の説明もきわめて短く、物語の「あらすじ」をふくめて200字程度で説明されていた。

なお、この『ワウオリ』展示について、ここであらためて振り返ってみれば、上に上げたような目的や意図があったとはいえ、アイヌの伝統的住居展示における「情景展示」的な性格が強い、誤解を恐れずにいえば「雰囲気作り」的なものであったことを告白しておきたい。

第5章 第5節 展示物としての言語 単語の展示

つぎに実際の展示物に言語が直接関連づけられた例をみてみたい。ひとつは、子どものための博物館の例であり、ひとつは民博の言語展示である。

子ども博物館に見る言語展示

子どもの博物館の例は、出利葉が2000年にアメリカ合衆国ボストンにある子ども博物館（The Boston Children's Museum）において確認したものを紹介したい（現在は展示替えがおこなわれ、この展示はない）。

子どもたちに人気のテレビ番組セサミ・スト리트のキャラクターを利用した展示「SESAME STREET®」では、幼稚園児など低年齢の子供たちが、体を動かしながら「単語」の綴りで「遊ぶ」ことができる仕掛けとなっている。（写真3）手元のハンドルを回すことで、連動する六面体が回転し、それぞれ4つのアルファベットが選択される。この装置が3つあり、3語からなる「単語」が決定されることになる（写真では、PIGが選択されている）。何通りの単語を選択することができるのかについては、確認していない。

北米の子どもの博物館には理念があり、このボストン子供博物館についても染川香澄が紹介している（染川1994）。この制限のもとでの展示であり、さらに対象が制限されているので、この展示におおくを盛り込むことは、はじめから考えられてはいないといえるだろう。だから、ここでいろいろと議論しこの展示に望むことは、本稿の文脈からは意味がない。それより、ここでは、単語とその綴りを対象にした展示があるということを確認しておくことにする。

なお、アメリカ合衆国が、おおくの地域からの移民を受け入れており、いくつかのコミュニティも存在することを考慮すれば、この展示は、低年齢の「英語話者」だけを対象とした展示とはいいきれないのではないかと感じたことも付け加えておきたい。

展示テーマとしての「言語」—国立民族学博物館の例
民博（2015年11月時点）では、地域ごとの展示とは別に、言語に関する展示を「言語」という展示を設けている。「言語」の展示は、スペース自体は他の所と比べて広くはないが、その中で下のような7種類の展示を行っている。

①音声記号のスタンプを使って、その音声が開ける「ことばスタンプ」（写真4）

②自分の発音を音声解析ソフトで解析できる「声であそぼう」

③さまざまな言語による絵本「はらべこあおむし」の聞き比べ

④日本語諸方言による「ももたろう」の聞き比べ

⑤世界の諸言語の概説がわかる「世界のことば」

⑥文字の系統などがわかる「世界の文字」

⑦さまざまな言語に翻訳された「星の王子さま」

このうち①～⑤がモニターや音声機材を使った展示である。①と②は専門家の中で使われている教材や分析装置を利用して、展示用に改良したものである。③と④は同一の物語の朗読音声を集めるために、現地に行って録音した資料を使用しているのものも多いように思われる。③の場合は音声の流れと、モニターに日本語、英語等の文字テロップが表示される。⑤と⑥は短めの文章でそれぞれの概説が行われており、文字や各言語の情報を知るには適していると言えよう。展示物に言語が直接関係づけられたという言い方をすれば、唯一⑦がそれにあたるだろうか。⑦の「星の王子さま」は民博の言語展示の入り口付近に80冊の本が配架されていて、図書館にしているような気分好きな本を手にとることができる。

全体の展示コンセプトは、個別言語の紹介よりも、一般的に広い意味での「言語」に焦点を絞り、世界中にあるさまざまな言語（方言を含む）を紹介し、その多様性を伝えている。なお、機材や扱う言語の幅も含め、地方の博物館では真似ができない規模であるため、民博の「言語」の展示を参考に言語展示を考えるのは、十分な予算と人工が必要となるのは言うまでもないだろう。とはいえ、2.2節で触れたように「ことば」を展示するのではなく、物質を介在させて、形を持つものとして「ことば」を展示している点は十分に評価してよいだろう。その上、①や③において特にパリエーションが考えられており、飽きない工夫がなされた上に、言語に興味関心を寄せてもらう工夫がなされていると言えるだろう。

補足として、各地域ごとの言語展示に触れておくと、

そこでの展示内容は大きく各地域ごとの導入展示部分、個別展示、展示品のラベルの3に分類できる。各地域ごとの導入展示では、言語分布図と言語状況の概説が日本語と英語で掲示されている。すべての地域の展示で行われているか確認していないが（特に北ブロック部分）、個別の展示では、例えばヨーロッパ地域の展示では、移民政策をテーマにした展示の中で移民してきた人たちの言語で書かれた教科書や雑誌などが展示されている。またオセアニアの地域展示では、オーストロネシア諸語の分布と系統関係を示した巨大なパネルと共に、その中の13言語を聞き比べることが出来る音声展示を設置している。展示品のラベルは、展示物名、収集地、年代が日本語と英語で書かれている。しかし、日本語の欄の展示物名の表記について館全体で統一されてはいないようで、展示品を現地での呼称とその補足という組み合わせが一部の見られた。（田村）

第5章 第6節 博物館における言語展示一小括

以上、「言語」が博物館で「展示」された実例を概観してきた。この章の冒頭でも述べたように、筆者らが観覧した博物館例はおおくはない。そのような少ないサンプルをもとに、なんらかの類型化をおこなうのは、危険がともなうことは承知している。あえてそれをおこなうのは、博物館展示における言語展示の事例を紹介しながら将来的な課題を含めて整理することで、いわゆる歴史・民族学系博物館における言語展示を考える素材を提供するためである。なお、博物館における「言語展示」

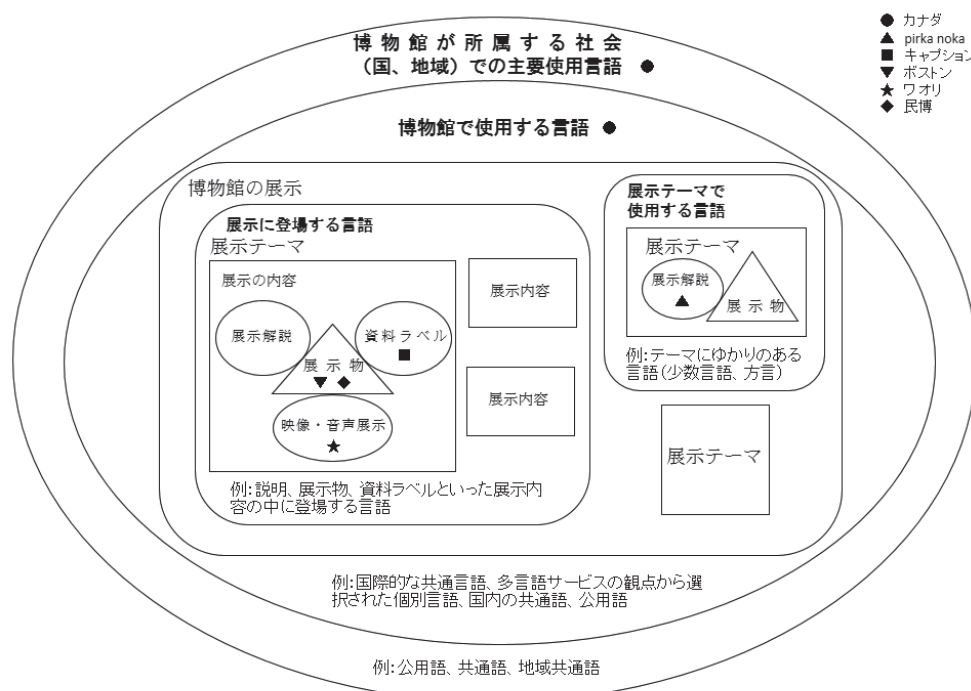


図1 第5章で取り上げた言語展示の図式化

の例が少ないことは、それ自体、言語展示がおかれている状況のみごとに描き出している。これについては、最後に触れることにしたい。

ここで、博物館における「言語展示」を考えるために、「社会」、「言語」、「博物館」、「展示テーマ」、「展示物」というキーワード使ってチャートを描いたのが図1である。

一般にというより当然のことであろうが、どのような博物館も、ある社会に所属し、そしてそこでは、その社会で通用するコミュニケーション・ツールとしての「主要使用言語」がある。これは、そのまま「博物館において（通常の説明で）使用する言語」ということになる。北海道にある博物館もふくめて日本の場合には、「標準語化された日本語」ということになる。これは博物館側が、展示物として意識したものではない。博物館が、その存在する社会において、なんらかの情報を伝達したいという目的から、その社会を成り立たせている言語の中から、共通性のあるものを選択している。ただし、多言語による来館者サービスを考えたとき、「博物館が所属する社会での主要言語」以外の言語が、「博物館で（特定の集団に説明するために）使用される言語」ということになる。北海道博物館の場合は、2016年3月時点では、英語、中国語（簡体字、繁体字）、ハングル、ロシア語ということになる。カナダ国立文明博物館におけるイヌイト語による解説文もこの範疇に入れてよいだろう。このような言語の選定は、多分にして国交や観光など国内の制度や国際的な要請、あるいは政治的関係によることが多い。こうした社会と言語との「関係」は、通常は意識されないし、問題となることもない。

問題になるのは、博物館において「言語」を展示を意識したときである。つまり5. 2節で取り上げた事例のように博物館の内部において、「展示テーマで使用する言語」を考えた場合や展示品の一部として「展示に登場する言語」を考えた場合に浮かび上がってくる問題である。ただしカナダ国立文明博物館の事例は既にイヌイト語が公用語という地位を獲得し、「博物館で使用する言語」となっているため、もう一つ取り上げた国内博物館における「アイヌ語」での解説の事例とは大きく異なる。2. 2節で取り上げてはいないが、「展示テーマで使用する言語」として、例えば北海道や沖縄にちなんだ展示テーマならばすべて北海道方言や琉球語で解説を行うといったものが該当する。

展示品の一部として「展示に登場する言語」を考える場合とは、5. 3節以降でみてきた各博物館での「言語展示」や「アイヌ語」によるラベルや解説文、音声による展示などが該当する。けれどもそれらはすべてが同じ位置づけで展示内容の中には登場していない点は注意しておくべきだろう。

例えば、解説文は、展示を作る側の意図がより強く感じられるものでもある。見慣れない言語であるからこそ、それゆえに展示性を帯びることになるが、解説文パネルという形態などから、展示物であるとはみなされないだろう。

また資料ラベルについても、社会を形作っている器物、道具類がもつ名称であるという点では、博物館が所属する社会の主要な使用言語なり、少数者の言語（方言や少数言語）と一体化している。しかしながら展示物である器物や道具と一体化しているという点では、展示性を持っているとはいえ、展示物としてはみなされないだろう。つまり資料ラベルの多くは、博物館が所属する社会の主要な使用言語によって確立されてきた「標準的な名称」というのが暗黙裡にあり、博物館という空間において与えられた絶対的な役割を持つ点で展示物とは異なる特徴を持つといえる。

最後になるが、旧記念館で実施した実際の「音声をきいていただく」展示は、ある（ストーリーをもった）まとまったものという点では、解説文に近いが、これは展示説明するものではなく、いわゆる「情景展示」の性質が強い。そのためあくまでもある「展示物」や展示を構成する諸説明の一部であり、「言語展示」という位置づけ、または道具や漆器と同じく展示物という位置づけるわけにはいかないだろう。

そうして見ると、筆者らの調査が不十分であるなかで筆者らの見聞の範囲で事例を紹介してきたが、やはり「言語展示」という狭義の範疇に入る事例は、多くはないことがわかる。そうした事情は5. 1節でも触れたように、日本の博物館が器物や動植物標本を中心に収集し、それを展示してきたことと無関係ではないであろう。いふなれば、日本の博物館も含め、博物館における「言語展示」はまだ未熟であり、博物館と「言語」の関係性や展示の可能性について、さまざまな課題や問題点を議論する余地は十分に残されていると言えるのではない。筆者らはそう考えている。（出利葉・田村）

第6章 まとめ

「アイヌ語ブロック」は、「子どもたちが、楽しみながら感覚的にアイヌ語の語彙や文法に親しめる」ことが基本コンセプトであった。まず、この点についていえば、われわれが展示場において来館者の動きを確認したところでは、確かに学校団体を含めて子どもたちには滞在時間が長いスポットであるといえる。さらに、解説文を読まないで、いきなりブロックを動かして始めている子どもたちも見受けられた。展示の前提となる解説文を読んで頂けていないのは、展示の理解という意味では、いささ

か不安ではあるが、逆に、それだけ取り組みやすい展示物であることも意味しており、さらに検討しなければならないところだろう。

言葉とくにアイヌ語が博物館展示のなかで紹介されるときには、音声に伴うにせよ、文字情報だけにせよ、親族呼称や地名、器物名など個別の「単語」として登場することが多かったように思う。この点で、「文章（を作成する）」レベルまで引き上げた「アイヌ語ブロック」は、「形を持たないもの」として「ことば」を捉え、それを展示に転置するのではない。そうではなくブロックという形態の「形をもつもの」として展示品（展示資料といっても良いかも知れない）としたところは、評価されてよいであろう。このことは、「アイヌ語ブロック」が、先の図1において、一般的な展示資料と同じ展示物のところに位置する国立民族学博物館の「ことばスタンプ」やボストンの子ども博物館の例と比較しても、評価されてよいであろう。

一方で、これまでも述べてきたように、いくつかの問題点や課題もある。もちろんアイヌ語の体系は、このブロックで示されたような「単純な」ものではない。このブロックが「単純化された仕掛け」であるため、解説

が十分に読まれていないデメリット（メリットでもあるのだが）はすでに触れたが、この点で、「ブロックころがし」体験だけで、「アイヌ語はこれぐらいしか文がないのか」と早合点されては困るという危惧ももっている。また、この「アイヌ語ブロック」で興味をもった子どもたちに、つぎにどのようなプログラム、とくに博物館としてどのような展示や講座などの企画を用意すればよいのかという課題もある⁽³²⁾。

また第3章でも触れたように、アイヌ語表記法をどのように紹介するかという問題もある。現在、一般的にはローマ字表記、カタカナ表記を用いているが、その詳しい説明なしに特定の表記法を展示で用いることは、説明責任を果たしているとは言えないだろう。また、アイヌ語に限らず言語とそれを表記する文字との関係をどのように説明するのか。このことも今後の課題である。

今後は、自己評価だけではなく、博物館職員や博物館学研究者、アイヌ語研究者に留まらず言語学者や文化人類学者も含めた他者による評価を受けながら、さらに改善していかなければならないと考えている。おおかたのご意見、ご指導をお願いしてひとまず筆を置くことにしたい。（田村・出利葉）



写真1 アイヌ語ブロック



写真2 カナダ国立文明博物館におけるイヌイト語表示(1990年出利葉撮影)



写真3 ボストン子ども博物館における言語展示の例（2000年出利葉撮影）



写真4 国立民族学博物館『ことばスタンプ』展示（2015年田村撮影）

注

- (1) 北海道道立アイヌ民族文化研究センターは、主に言語、芸能、音楽、歴史、生活技術等の無形文化についての調査研究等を行い、その成果の普及をもってアイヌ民族の文化の振興に寄与することを目的に、1994（H6）年に設立された。
- (2) ここで「少数者」の言語といういいかたを採用した理由は、歴史・文化博物館を意識してのことである。そうした博物館が、人や人間集団、民族を念頭に置いて、それを意識した展示をおこなっていることによる。ここでは、一般的にいわれる「方言」についても、通常語られる集団の規模によっては「少数者」の言語にふくまれてよいと考えている。
- (3) 「北海道博物館基本計画」は、道のHPで見ることができる。
- (4) この項目は、調査研究に裏付けられた正確な情報に基づいて活動し、研究成果を展示に反映させることで、博物館展示の真正性や客観性を保ち、博物館への信頼を得ることが目標である（日本博物館協会編（2010）を参照）。
- (5) 現在、Ⅲ-1の「来るたびに違う」展示を実現するものとして展示場の一部分に「クローズアップ展示」を設けている。またⅢ-2「飽きない」展示としては、ハンズオン展示、定期的に流れる時報のような音声、乗って遊べる動物のぬいぐるみなどがある。Ⅲ-3はリフレットや音声案内、多言語解説シートなどがある。
- (6) 査読者から「形を持たないもの」として言葉を展示することが「3つの使命」からどのように評価されるかの分析を求められた。以下の分析は、査読原稿において第5章との兼ね合いから一時的に外していたが、本原稿においては査読者のご指摘を踏まえながら、第5章及び本報告の趣旨の範囲内で原稿に加えたものである。
- (7) これは館全体としてキャプション、解説文を小学校4年生程度が読めることを一つの目安としていたことも一つの要因である。
- (8) なお、アイヌ語ブロックの検討の際には、別の活用法として、学校団体等が来た場合にワークシートを作成して配布し、展示場で答えを探してもらったりすることもできるだろうという提案もあった（使命Ⅲ-2）。
- (9) ここで映像コーナーと呼ぶのは、中テーマ「ことばを聴く」の中の3つめの小テーマ「見て、聞いてアイヌ文化の世界」のことである。「見て、聞いてアイヌ文化の世界」のコーナーには、大型画面で映像を見る「ふれてみよう＜ことばの世界＞」という一般向けの入門的なコーナーと、小型画面で大型画面の映像を含めさまざまな映像が見られる、もう少し詳しく知りたい人向けのコーナーがある。本報告では、説明の便宜上、前者を「映像1・入門」、後者を「映像2・初級」と呼ぶ。
- (10) アイヌ民族の認知度についての参考資料の一つとして、2013（H25）年11月に政府が行った「アイヌ政策に関する世論調査」がある。
- (11) 具体的な取り組みについては、注5や注7を参照のこと。
- (12) 日本の言語政策の概観は、安田（2010）が参考になる。
- (13) アイヌ語の音節末のp、t、kは専門用語で内破音と呼ばれ、舌を使って口腔内で閉鎖を作るが、息を解放しない音で

ある。またrは個人差があるが、総じて「ら」のような舌を口腔内で弾く音である。また音節末のrの後には、直前の母音に似た音色の音声が出るため、聞き分けが難しい。

- (14) アイヌ語の名詞は、「～の」という所属関係を表す場合のみ形を変える。それ以外はラテン語やロシア語のように格関係によって形は変わらない。つまり、文中で主語や目的語の名詞は日本語の「が」「を」のような形式を伴わないで、裸の形で表示される。
- (15) 学研教育総合研究所のHPアドレス：<http://www.gakken.co.jp/kyouikusuken/whitepaper/201112/index.html>（2016年1月1日アクセス）
- (16) アイヌ語ブロックのプラスチック本体の制作においては、危険対策の観点から、片手では持てないサイズで、それなりに重さがあり、落ちてても破損しない強度になるように、業者にプラスチックの厚みをミリ単位で調整して頂いた。
- (17) イラストは、公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構がアイヌ語教材の一つとして制作したアイヌ語カルタを参考にして、イラスト作成を依頼した点も多々ある。カルタのサンプルは同団体のHPで見ることができる。
- (18) 統合関係（syntagmatic relations）とは、文の配列の関係性、アイヌ語ブロックで言うと副詞句、名詞句、動詞句といった横の関係を指す。連合関係（paradigmatic relations）とは文を作る各要素で入れ替えが可能な要素同士の関係のことで、アイヌ語ブロックで言うと、一つのブロックにおける面同士の関係を指す。
- (19) このことに関連して、ここで詳しく述べる余裕はないが、筆者のうち出利葉は、博物館展示においては絶対的に「正しい展示」というものはないという意見を持っている。また、逆に絶対的に「誤った展示」というものを決めることも簡単ではないという意見を持っている。このことを付け加えておきたい。
- (20) 同書中、執筆者の一人佐々木利和氏は博物館史をたどるなかで「帝室博物館へ」と題する部分で、明治中期までに設立された東京、奈良、京都の帝室博物館が、「宝物を陳列の格に据えるという方法」がとられていたこと、それが「のちの東京国立博物館に見られるような名品志向」となっていったことを述べている。（佐々木 1992）日本の博物館が、標本や器物中心に収集し、展示するようになったことを考えるときに、示唆的な発言であると思う。
- (21) 海外の博物館においても、言語展示の問題を正面から取り上げ、議論している学術書はないようである。ちなみに、筆者の手元にあったレイスター大学のGaynor KAVANAGH編集による『MUSEUM LANGUAGE Objects and Texts』（1991）所収論文、「How language means: an alternative view of museum text」（Helen Coxall 1991）は解説文における使用言語の問題を取り上げているが、（英文としての）読みやすさわかりやすさを中心に、文法や文体、単語選択などが議論されていて、先住民言語や方言などについては、積極的に議論されてはいないようである。今後の課題としておきたい。
- (22) ユネスコ（国連教育科学文化機関）が平成21年2月に発

表した“Atlas of the World’s Languages in Danger”によると、イヌイット語は方言によって脆弱、危険、重大な危険の三つの状態に位置付けられている。（この注は田村による）

- (23) 展示会の「あいさつ文」について、野村義一北海道ウタリ協会理事長および横路孝弘北海道知事（どちらも当時）のものが、社団法人北海道ウタリ協会編の図録（1994;4及び6）にも掲載されている。
- (24) アイヌ語を表記するということの、下部的な問題として、どのように表記するかという問題がある。これはローマ字表記の場合、カタカナ表記の場合ともに起こりうるものである。
- (25) 本稿の査読の際に、『ピリカ ノカ』展でのアイヌ語解説を含め、展示におけるアイヌ語表記の導入をどのように考えるか、大変重要な問題に関わることであり、しっかりとその問題を認識して、課題を整理すべきであるというコメントがあった。この節の報告の主な部分は出利葉の私見を述べたものであるが、以下の部分については、共著者である田村と文章の内容を吟味した上で、追加した。
- (26) こうした問題をアイヌ語について考える際には中川(1996)の議論が大いに参考になる。（この注は田村による）
- (27) 本文では大きく触れていないがアイヌ語による造語や作文・翻訳も重要な問題である。造語はアイヌ語にアイデンティティを持つ人たちが使っている人たちに受け入れなければ、定着していかないと一般的には考えられている。作文は作文自体が問題ではなく、作文・翻訳をしていく上で必要な語彙研究（辞書的な研究、単語の使い方といった実用的な研究）がアイヌ語の場合極めて乏しいことが問題であると考え。そうした研究蓄積の乏しさは、母語話者が作るような文章にするための判断材料の乏しさも意味し、造語の問題も関係する。（この注は田村による）
- (28) 個人的な意見交換の場で、アイヌ語表記の採用について安直で拙速であったとの批判を出利葉は何度か受けている。
- (29) なお、北海道博物館の第二テーマ『アイヌ文化の世界』では、定期的に展示物の入替を行っており、その都度、文脈がことなる。たとえばイクパスイは、「カムイや先祖にお酒をささげるへら」（2016年1月現在）と大文字で表示し、下に小さく「捧酒匳（イクパスイ）」と示している。
- (30) 第二テーマ『アイヌ文化の成立』のコンセプト、構成については、出利葉（2000）を参照されたい。なお、このテーマにおいて、「アイヌ文化が擦文文化・オホーツク文化に続く位置にあることによって」、「アイヌ文化の歴史性の理解を大きく混乱させるもの」であったとの指摘、および本稿においてもそのことを付記すべきことを、査読者の一人から頂いた。ご指摘頂いた点について、旧記念館は、『常設展示解説書2 アイヌ文化の成立』のなかの「はじめに」において、この展示が、歴史性という、それまでにない新しいコンセプトをもとにして組み立てられていること、にもかかわらずすでに展示に問題があることを、展示オープン後「はやばやと」告白している

（北海道開拓記念館編 1999）。また、出利葉は、当時学芸員であった手塚薫と協議したうえで、歴史的なながれのなかで、アイヌ文化をどのように捉え、そしてそれをどう展示すべきか、ということについても、論じている（北海道開拓記念館編 1999：24-25）ことを注として付記しておきたい。

- (31) 白沢ナベさんによる『ワウオリ』の語りについては、たとえば片山言語文化研究所編（1995）に白沢ナベさんによるアイヌ語の謡いがCDで収録されている。なお、記念館で使用したワウオリの録音は、奥田統己札幌学院大学助教授（当時）、豊岡理子氏立ち会いのもとに、出利葉が記念館講堂においておこなっている。
- (32) じつは「アイヌ語ブロック」からつぎのステップへと展開をのぞむ来館者のための仕掛けが用意されていないわけではない。たとえば、「アイヌ語ブロック」と近い位置に配置された言語や芸能などの展示物のタイトルとして、まず『見て聞いてアイヌ文化の世界』というおおきなタイトルのもとに、「ウコウクで歌われる曲を聴いてみましょう」「ふれてみよう〈ことば〉の世界」などより来館者が興味をそえられるようなタイトルにしたほか、ビデオで選択できる「散文説話」の解説には「アイヌ語の語りを聴きたい人は迷わず選んでいます」、「英雄叙事詩」では「リズムカルで勇壮な語りです」など、より「くだけた」表現を採用し、「ブロック」からほかの展示物へと足が向かうように配慮している。ただし、この仕掛けがどれくらい成功しているのかは、わからない。今後、来館者の動線調査もふくめて、さらに検討していきたい。また、普及行事のプログラムでも、田村はとくに子どもたちを対象にした「ちゃれんが子どもクラブ『アイヌ語であそぼう！』」を開催した（2016年1月16日）。これはアイヌ語の説明も地名など身近なところから入り、総合展示で使用しているアニメーションによる物語の説明などのあと、クイズ形式をとりいれながらアイヌ語に「親しんで」もらおうという内容のものであったが、総合展示におけるアイヌ語ブロックを踏まえてのプログラムであることを申し添えておく。

引用文献(アルファベット順)

- Coxall, H., 1991, How Language Means: An Alternative View of Museums Text. Kavanagh, G., ed. *Museum Languages Objects and Texts*, Leicester University Press.
- 出利葉浩司 2000. 博物館はなにを伝達するのだろうか？ 学芸員はなにを語ろうとしたのか？ 開拓記念館アイヌ文化展示のコンセプト. 北海道開拓記念館研究紀要 28: 61-80. 北海道開拓記念館.
- 北海道開拓記念館編 1999. 99移動博物館 アイヌの装い. 北海道開拓記念館.
- 北海道開拓記念館編 2000. 豆本25 北海道開拓記念館第125回テーマ展 北海道開拓記念館所蔵 アイヌ衣服展. 北海道開拓記念館.

北海道開拓記念館編 1999. 常設展示解説書2 アイヌ文化の成立. 北海道開拓記念館.
伊藤寿朗・森田恒之編 1978. 博物館概論. 学苑社.
萱野茂 1978. アイヌの民具. すずさわ書店.
片山言語文化研究所編 1995. カムイユカラ KAMUY-YUKAR. 片山言語文化研究所.
国立民族学博物館編 1993. アイヌモシリ 民族文様から見たアイヌの世界. 国立民族学博物館.
社団法人北海道ウタリ協会編 1994. ビリカノカ アイヌの文様から見た民族の心. 社団法人北海道ウタリ協会.
中川裕 1996. 第12章 少数民族と言語の保持. 宮岡伯人編. 言語人類学を学ぶ人のために. pp. 263-280. 世界思想社.
中村たかを 1992. 博物館概論. 源流社.

日本博物館協会編 2010. 博物館倫理規程に関する調査研究報告書. 日本博物館協会.
佐原眞 1987. 考古学をやさしくしよう. 京都府埋蔵文化財論集 第一集. 京都府埋蔵文化財センター. (金関・春成編 2005. 佐原眞の仕事6 考古学と現代. 岩波書店に再録. 本稿では金関・春成編によった)
染川香澄 1994. こどものための博物館: 世界の実例を見る. 岩波ブックレット 362. 岩波書店.
佐藤知己 2008. アイヌ語文法の基礎. 大学書林.
安田敏朗 2010. 日本語政策史から見た言語政策の問題点. 田尻英三・大津由紀雄編. 言語政策を問う! . pp. 133-147. ひつじ書房.

A Trial Regarding Linguistic Exhibitions at the Hokkaido Museum (Report): Focusing on the “Ainu Language Block” Established in Theme Two of the Main Exhibition

Masashi TAMURA and Koji DERIHA

This paper is a report on the production process regarding the “Ainu Language Block,” a new exhibit at the Hokkaido Museum, produced to enable visitors to enjoy coming into contact with the Ainu language. This aim of the paper is to report on how much language, which is normally intangible, was made “tangible” through the museum exhibition, and use the report as material for in future debates. The Hokkaido Museum opened in April 2015, and is the result of a merger between the former Historical Museum of Hokkaido and the former Hokkaido Ainu Culture Research Center. The Ainu Language Block is established in Theme Two, “The Culture and Recent History of the Ainu.” This exhibition is an

adapted version based on an exhibit at the former Hokkaido Ainu Culture Research Center. The report focuses on how language has been handled in historical and ethnological museum exhibits to date, with a section chapter confirming within the scope of the authors’ knowledge. This type of structure was chosen for two reasons: one was the desire to improve the Ainu Language Block while receiving third-party assessment from museum employees, museology researchers, Ainu language researchers and the like. The second reason was to offer a topic in which to consider the issues involved in exhibiting languages, especially minority languages (including dialects), in museums.